

長曾土壙墓群・刎畠1号墳

2000年3月
安来市教育委員会



調査後近景(東から)



調査後遠景(西から)

長曾土壙墓群・刎畠1号墳

2000年3月
安来市教育委員会

例　　言

1. 本書は、有限会社黒井田重機工事の委託を受けて、安来市教育委員会が平成11年度に実施した長曾土壙墓群・刎畠1号墳の発掘調査報告書である。

2. 現地調査期間は、以下のとおりである。

平成11年4月27日～平成11年7月20日

3. 調査組織は次のとおりである。（順不同・敬称略）

調査主体 安来市教育委員会

事務局 市川博史（安来市教育委員会 教育長）

成相二郎（安来市教育委員会 文化振興課長）、武上 巧（同文化係長）

調査指導 渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）

大谷晃二（島根県立松江北高校）

調査員 水口晶郎（文化係主事）、大塚 充（同）、金山尚志（同一主任主事）

内務整理 泉あかね、中山和美、矢尾井由佳

4. 現地調査、及び資料整理については、上記の調査指導の先生の他、有限会社黒井田重機工事、株式会社秦精工、足立克己（島根県教育庁文化財課）、椿 真治（同）、池淵俊一（同）、中川寧（島根県埋蔵文化財調査センター）、岩橋孝典（同）、藤永照隆（出雲市教育委員会）、三宅博士（安来市教育委員会）、永見英（同）のご指導・ご協力をいただいた。（敬省略）

5. 刈畠1号墳出土鉄刀のX線透過写真撮影については、島根県埋蔵文化財調査センターのご協力・ご指導を得た。

6. 本書で使用した遺構記号は以下のとおりである。

S K……………土壙墓・木棺墓 S D…………溝状遺構 S X…………性格不明遺構

7. 長曾土壙墓群については、『長曾土壙墓群』（安来市教育委員会、1981年）の調査範囲の土壙墓・木棺墓の番号はそのままとし（SK01～26）、新たに発見された土壙墓・木棺墓にはそれに続く番号（SK27～）を付した。

溝状遺構については、イ溝状遺構についてはSD01とした。ロ溝状遺構については再調査の結果、木棺墓の可能性が高いことからSK27の番号を付している。その他の新たに発見された溝については、それに続く番号（SD02～）を付した。

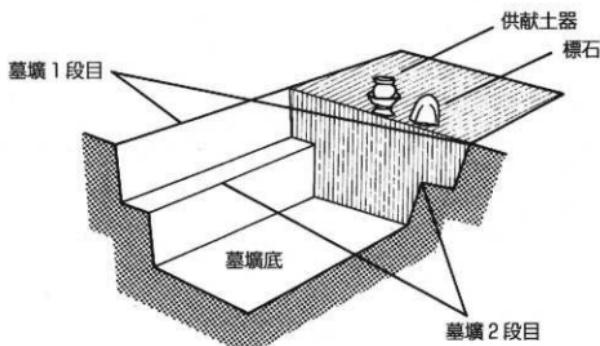
8. 長曾土壙墓群の遺構図面のうち、前掲の『長曾土壙墓群』に掲載された遺構（SK02・05・06・13・19・20・21・23・24・25・26、SD01）については、そのまま再掲載した。1981年の調査範囲で、同報告書に未掲載の遺構については、再調査の結果検出した遺構を実測したものを掲載した。遺構の測定値について、基本的に前掲の報告書掲載値（規模・主軸方位）を尊重したので、本書で掲載した遺構図の数値と合わない場合がある。

9. 本遺跡の弥生時代後期の遺構で、土壙墓群の他に木棺墓群や区画墓と考えられる遺構も多数検出されていることから、本来ならば「長曾墳墓群」と称すべきであるが、今回は従来の遺跡名となり「長曾土壙墓群」とした。

10. 本書の挿図中の方位は、調査時の磁北であり、真北に対し約7°西偏、平面直角座標（Ⅲ系）の

方眼北に対し約8°西偏する。

11. 本調査に伴う遺物・実測図・写真等は、安来市教育委員会で保管している。
12. 本書は、第2章第2節米垣遺跡を三宅博士（安来市教育委員会）が執筆し、それ以外を水口が執筆した。本書の編集は、水口が行った。
13. 本書では、土壙墓・木棺墓の埋葬施設の構造について、下図のように呼び分けた。



埋葬施設の呼び方

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 位置と環境	2
第2節 米垣遺跡	5
第3章 調査の概要	9
第1節 長曾土壙墓群	9
第2節 刈畠1号墳	52
第3節 その他の遺構	57
第4章 まとめ	61
第1節 長曾土壙墓群	61
第2節 刈畠1号墳	65

挿図目次

- 第1図 周辺の主要遺跡位置図 (S=1/10, 000)
第2図 米垣遺跡調査区配置図 (S=1/1, 000)
第3図 米垣遺跡SB01実測図 (S=1/60)
第4図 米垣遺跡SB01出土遺物実測図 (S=1/3)
第5図 米垣遺跡SB02実測図 (S=1/60)
第6図 米垣遺跡SB03実測図 (S=1/60)
第7図 長曾土壤墓群1981年調査区位置図・遺構配置図
(S=1/1, 200・S=1/150、「長曾土壤墓群」1981よりトレース)
第8図 調査前測量図(上)・弥生時代遺構配置図(下) (S=1/300)
第9図 SK01・02・03・04・14・15実測図
(S=1/30、SK02は『長曾土壤墓群』1981よりトレース)
第10図 SK05・06・07・08実測図
(S=1/30、SK05・06は『長曾土壤墓群』1981よりトレース)
第11図 SK09・10・11・12・13実測図
(S=1/30、SK13は『長曾土壤墓群』1981よりトレース)
第12図 SK16・17・18・19実測図
(S=1/30、SK19は『長曾土壤墓群』1981よりトレース)
第13図 SK20・21・22・23実測図
(S=1/30、SK20・21・23は『長曾土壤墓群』1981よりトレース)
第14図 SK24・25・26・27・28実測図
(S=1/30、SK24・25・26は『長曾土壤墓群』1981よりトレース)
第15図 SK29・30・31・32実測図 (S=1/30)
第16図 SK33・34実測図 (S=1/30)
第17図 SK35・36・37実測図 (S=1/30)
第18図 SK38・39・40・41実測図 (S=1/30)
第19図 SK42・43・44・45実測図 (S=1/30)
第20図 SK46・47・49実測図 (S=1/30)
第21図 SK48・50実測図 (S=1/30)
第22図 SK51・52実測図 (S=1/30)
第23図 SK53・54・55・56実測図 (S=1/30)
第24図 SK57・58・59・60・61・62実測図 (S=1/30)
第25図 SK63・64・65実測図 (S=1/30)
第26図 SK66・67・68実測図 (S=1/30)
第27図 SD01(区画墓1)実測図
(S=1/60、「長曾土壤墓群」1981よりトレース、一部改変)

- 第28図 SD 03(区画墓2)実測図(S=1/60)
 第29図 長曾土墳墓群遺物出土状況図(S=1/300)
 第30図 長曾土墳墓群調査前表採遺物実測図(S=1/3、SK34・35付近)
 第31図 長曾土墳墓群出土遺物実測図(S=1/3)
 第32図 長曾土墳墓群 1981年調査時出土遺物実測図
 (S=1/3、『長曾土墳墓群』1981よりトレース)
 第33図 長曾土墳墓群出土標石実測図
 (S=1/3、1・2は『長曾土墳墓群』1981よりトレース)
 第34図 刃畠1号墳調査後測量図・埴輪出土状況図(S=1/100)
 第35図 刃畠1号墳填丘土層図(S=1/60)
 第36図 刃畠1号墳主体部実測図(S=1/30)
 第37図 刃畠1号墳主体部出土遺物実測図(S=1/3)
 第38図 刃畠1号墳出土円筒埴輪実測図(S=1/3)
 第39図 SX02・03実測図(S=1/30)
 第40図 SD 02実測図・遺物出土状況図(S=1/60)
 第41図 SD 02出土遺物実測図(S=1/3)
 第42図 SD 04実測図・遺物出土状況図(S=1/60)
 第43図 SD 04出土遺物実測図(S=1/3)
 第44図 遺構に伴わない遺物実測図(S=1/3)
 第45図 長曾土墳墓群グループ分け図(区画墓1・2、A~I群)



作業風景

第1章 調査に至る経緯と経過

秦精工株式会社の工場の背後の丘陵の北側側面が急な崖になって危険な状態となっており、早急な崖地崩壊防止策を施す必要性に迫られていた。また同社が工場を増設する計画も上がったことから、その工場の背後の丘陵を削平し工場用地として造成するとともに、崖地崩壊防止工事も併せて実施することとなり、平成9年8月に市教育委員会に遺跡の分布調査の依頼が提出された。

これを受け、現地を確認したところ周知の遺跡である長曾土墳墓群と刎畠古墳群（古墳2基）が含まれることが判明した。また、これら遺跡が所在する丘陵の頂部に平坦面があり遺跡が所在する可能性があることから、この部分についても遺跡の有無を確認するために試掘調査の必要性がある旨を、併せて回答した。これを受け、秦精工株式会社とその土地の所有者で造成工事を請け負う有限会社黒井田重機工事と市教委との3者で遺跡の取り扱いについて協議した結果、遺跡の現状保存は困難であり、発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。

長曾土墳墓群については、1981年（昭和56年）に刎畠1号墳と2号墳とされていた地形の高まりの間のわずかな傾斜を有する平坦面の調査が実施され、弥生時代後期の26基の土墳墓・木棺墓などを確認するなど成果をあげている。しかし、調査結果から調査区外にも遺構の広がりが推測できることから、調査済の範囲も含めて再調査を実施することとなった。刎畠古墳群は、1981年の長曾土墳墓群の発掘調査に先立って踏査した際に発見されたもので、2基の古墳からなっていると考えられたていた。

現地調査は平成11年度に実施することとなり、平成11年4月20日に有限会社黒井田重機工事と埋蔵文化財発掘調査についての委託契約を締結し、同年4月27日から調査を開始した。まず、前述の丘陵頂部の試掘調査を実施した結果、墳墓の周溝・墓壙と考えられる遺構を検出したことから丘陵頂部も本調査を実施することとなった。まず、調査区西端の刎畠1号墳から調査を実施し、鉄製刀を副葬していた理葬施設を1基検出した。また墳丘頂部から墳裾にかけて円筒埴輪片を検出した。次に（刎畠2号墳）の調査を実施したところ、周溝部分と考えられていた部分から底部に糸切痕が認められる須恵器が出土し、この（刎畠2号墳）の周溝と考えられていた部分が実は奈良時代の掘削であり、その掘削や弥生時代の地山の加工等で（刎畠2号墳）が占墳のように観察されたことが判明した。また周溝部分と考えられた場所から丘陵基軸側の尾根のやや傾斜のきつくなる斜面にかけて、当初において遺構の所在が予想していなかった場所から土墳墓・木棺墓が多数検出された。今回の調査において木棺墓・土墳墓41基・溝状遺構1条、1981年に調査されたものも合わせると木棺墓・土墳墓68基・溝状遺構2条もの弥生時代後期の遺構を検出した。またその他に性格不明土墳3基・古墳時代と奈良時代の溝状遺構2条を検出した。当初の予想を超える遺構を検出したが、予定通り同年7月20日に現地調査のすべてを終了した。出土した遺物や図面等の整理作業は、現地調査終了後随時実施した。

第2章 位置と環境

第1節 位置と環境

長曾土塙墓群・劍畠1号墳は、安来市黒井田町字劍畠、現在のJR安来駅の東約1kmの低丘陵上に位置し、奈良時代に編纂された『出雲國風土記』(733年編集)でいう意宇郡安来郷にあたる⁽¹⁾。

当遺跡が所在する安来町・黒井田町周辺の中海海岸部は、出入りに富む典型的な沈水性海岸線をなしている。そのため周囲には低地の発達は見られず、若干の谷水田があるのみである。当遺跡から北西側に望むことができる十神山(標高92.9m)は、『出雲國風土記』によれば当時は島であったことから、当遺跡の近くまで海が入り込んでいたものと推定される。

さて、当遺跡の周辺には数多くの埋蔵文化財が存在する。まず旧石器時代の遺物として小汐手遺跡で玉髓製の削器が単独で出土している⁽²⁾。次の縄紋時代の遺跡も少なく、前述の小汐手遺跡・高広遺跡⁽³⁾・浦ヶ部遺跡で縄紋土器が若干出土しているにすぎない。弥生時代前期の遺跡は小汐手遺跡で上器が出土しているにすぎないが、中期になると高広遺跡⁽⁴⁾で竪穴式住居跡が検出されている。後期になると遺跡数も増加し、第2節で詳しく紹介する米垣遺跡⁽⁵⁾をはじめ、小汐手遺跡・高広遺跡⁽⁶⁾・黒井田小林遺跡⁽⁷⁾など長曾土塙墓群⁽⁸⁾の築造された時期と重なる集落跡が多数検出されている。

古墳時代前期の古墳は現状では確認されていないが、浜小崎遺跡⁽⁹⁾で住居跡が確認されている。

中期に入るとこの地域の首長墓である毘売塚古墳⁽¹⁰⁾が築造される。全長42mの帆立貝式前方後円墳で、舟形石棺を直葬している。この他に首長墓と考えられる墳墓として、前方部が所在する可能性があり、組合式石棺を主体部に持つ十神山古墳⁽¹¹⁾や前方後方墳の油坪1号墳⁽¹²⁾が挙げられるが、いずれも墳丘規模は毘売塚古墳の半分程度である。

中期後半から後期前半に墳丘規模が10m前後の古墳が多数築造される。その中には特筆すべき古墳もあり、小馬木2号墳⁽¹³⁾は径11mと小型の円墳であるが家形埴輪・珠文鏡などが出土しており、油坪2・4号墳⁽¹⁴⁾は一辺10m強の方墳で墳裾に円筒地輪列が廻っている。客神社跡古墳⁽¹⁵⁾は2基の組合式石棺を主体部に持つており、その他石棺を主体部に持つ古墳として、宮の山古墳⁽¹⁶⁾(墳形不明、箱式石棺2基?)・御崎谷古墳⁽¹⁷⁾(墳形不明、舟形石棺)が挙げられる。

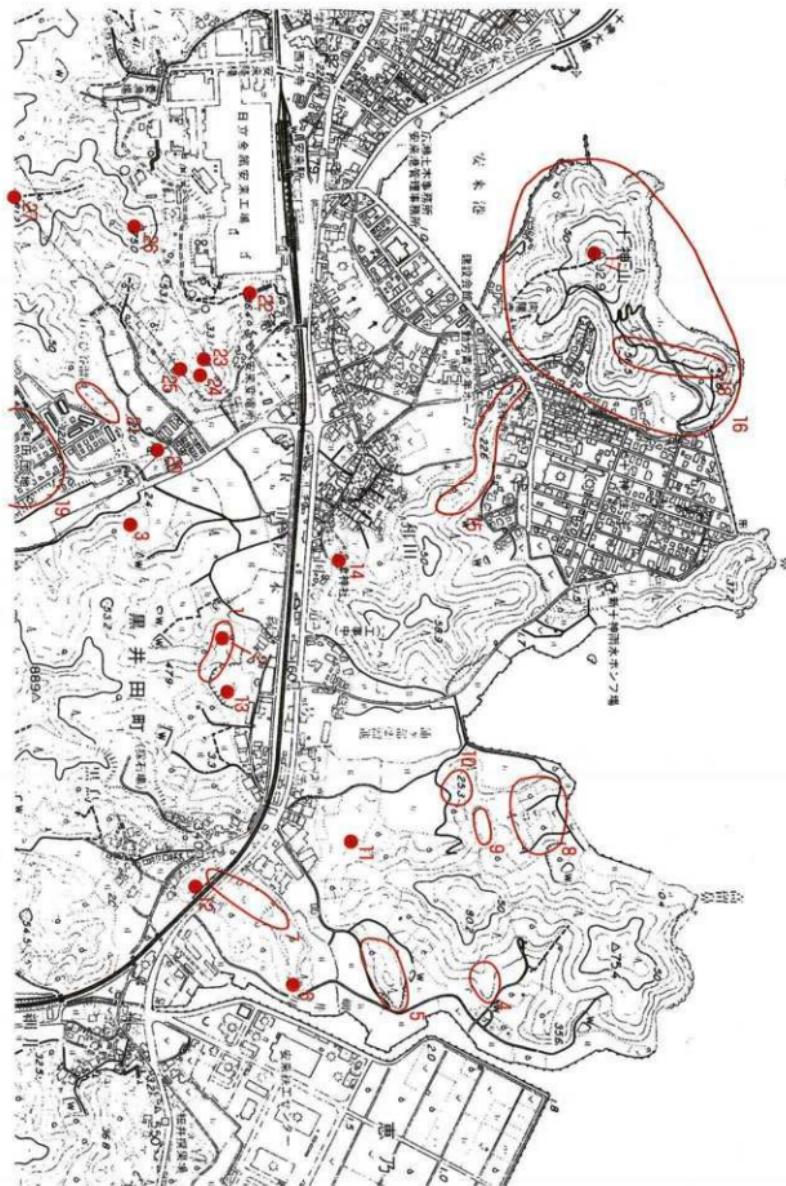
後期後半になると横穴墓が多数築かれる。なかでも全長11mの前方後円墳形の墳丘を持つ浜小崎5号墳⁽¹⁸⁾、家形石棺を内蔵し金銅装大刀などを副葬した高広IV区1号横穴墓⁽¹⁹⁾、銀象嵌の模様が刻まれた大刀が副葬されていた小汐手横穴墓A区2号横穴墓・B区4号横穴墓⁽²⁰⁾など特筆される横穴墓も少なくない。その他の横穴墓として黒鳥横穴墓群⁽²¹⁾・米垣横穴墓群⁽²²⁾などが挙げられる。中期から後期にかけて集落跡としては、小汐手遺跡・高広遺跡⁽²³⁾・長曾遺跡⁽²⁴⁾などで竪穴式住居跡・掘立柱建物跡などが確認されている。

当地域の古代から中世の様相は判然としないが、前代から平安時代にかけての掘立柱建物跡が高広遺跡⁽²⁵⁾で確認されている。また、油坪3号墓⁽²⁶⁾では南北朝時代と推定される陶製宝瓶印塔を持つ火葬墓が検出されている。前述の十神山は室町～戦国時代の山城で出雲国安来莊の地頭であった松田氏

の本城とされ、自然地形を利用した郭の加工跡が比較的保存状態が良好に依存している⁽²⁷⁾。尼子氏に背いた松田備前守が籠城した十神山城は1468年に尼子清定によって開城させられている⁽²⁸⁾。その後も出雲国の防衛体制の要として、尼子十砦の一つとして機能していたと考えられる。

周辺の主要遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	概要
1	長曾土墳墓群	弥生墳墓	本書・弥生時代後期画墓・土墳墓・木棺墓・弥生土器・標石
2	劍畠1号墳	古墳	本書・円墳・大刀、刀子、円筒埴輪
3	米垣遺跡	集落跡	本書・弥生時代堅穴式住居跡・弥生土器
4	浜小崎遺跡	集落跡	古墳時代前期堅穴式住居跡・鐵斧、砥石、土師器
5	浜小崎古墳群	古墳・横穴墓	古墳6基（前方後円墳・円墳・方墳）、横穴墓1穴、馬形埴輪、円筒埴輪、須恵器、上師器
6	米垣横穴	横穴墓	テント系家形埴人
7	黒島横穴墓群	横穴墓群	横穴墓2穴、大刀、鐵鎌、須恵器
8	小汐手横穴墓群	横穴墓群	横穴墓19穴、銀象嵌大刀、鐵劍、鐵鎌、刀子、玉、須恵器、土師器
9	小馬木古墳群	古墳群	古墳3基（円墳2）、家形埴輪、円筒埴輪、珠文鏡、須恵器、上師器
10	小汐手遺跡	集落跡	弥生～古墳時代堅穴式住居跡・加工段、旧石器削器
11	長曾遺跡	集落跡	堅穴式住居跡・須恵器
12	大日さん古墳	古墳	円墳1.2m、葺石、円筒埴輪
13	浦ヶ部遺跡	住居跡	繩紋土器、須恵器
14	宮の山古墳	古墳	箱式石棺
15	油坪古墳群	古墳群・中世墓	古墳4基（前方後方墳1・方墳3）、中世火葬墓、円筒埴輪列、形象埴輪、須恵器、陶製宝鏡印塔、石製五輪塔
16	十神山城	城跡	山城
17	I-神山古墳	古墳	前方後方墳？、蒲鉾形蓋石石棺
18	小十神山古墳群	古墳群	円墳2基、鐵刀
19	高広遺跡	横穴墓群・集落跡	弥生～古墳堅穴式住居跡・古墳～奈良掘立柱建物跡・横穴墓13穴、家形石棺・金銅裝双毫環頭大刀
20	客神社跡古墳	古墳	蒲鉾形蓋石石棺2基、須恵器
21	長瀬谷古墳群	古墳群	円墳
22	毘光塚古墳	古墳	前方後円墳4.2m、葺石、舟形石棺、円筒埴輪、鐵劍、鐵鎌、ヤス、鐵鎌
23	佐久保山古墳	古墳	円墳
24	佐久保山横穴墓群	横穴墓群	横穴墓群
25	黒井田小林遺跡	集落跡	弥生時代堅穴式住居跡・掘立柱建物跡
26	御崎谷山古墳	古墳	舟形石棺、鐵劍
27	日本台土墳墓	弥生墳墓	土墳墓

第1図 周辺の主要遺跡位置図 ($S=1/10,000$)

第2節 米垣遺跡

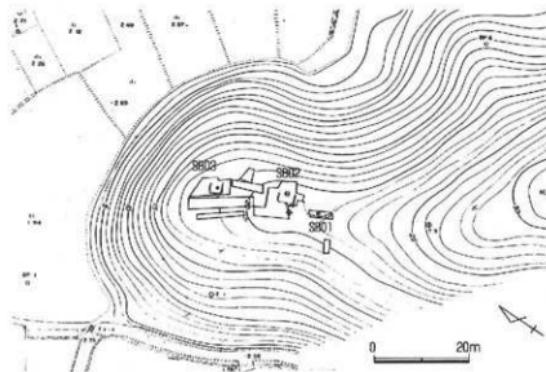
この節では前節で紹介した遺跡のうち、長曾上廣墓群に隣接し密接な関係を有すると考えられる弥生時代後期の集落跡（米垣遺跡）について報告する。

<遺跡の位置>

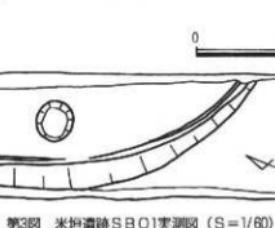
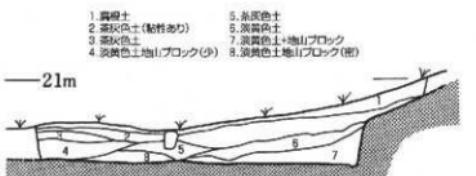
遺跡はJR安来駅の東方のやや奥まった標高20mの丘陵上端部に位置し、所在する地番は安来市黒井田町字米垣1309番地である。

<調査の概要>

調査はゴルフ練習場造成に先立ち、平成3年1月28日から2月2日まで安来市教育委員会三宅博士を調査担当者として実施した。調査に際しては、当初土壤等の埋葬施設がある可能性を考慮に入れ、



第2図 米垣遺跡調査区位図 (1/1,000)



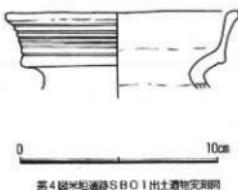
第3図 米垣遺跡SB01実測図 (S=1/60)

尾根筋中央にトレーニングを計9箇所を設定して行った（第2図）。結果、最も南に設定したトレーニングで竪穴式住居跡（SB01）を検出したのをはじめ、その他方形の竪穴式住居跡を2棟（SB02・SB03）検出した。SB01を除き、他の2棟は完掘した。これらの検出遺構は、北方に延る丘陵の中軸線よりもやや東側傾斜変換点付近に偏った状態で認められた。尾根の西側の傾斜変換点付近は、後世の山道などにより大きく改変されおり、東側への遺構の偏りが意図的なものであるか否かという点については即断し難いものであった。

<検出遺構の概要>

SB01（第3図）

丘陵上工事対象地の最南端で、直径約3.5m、深さ約1mを測る不自然な窪みが認められた。



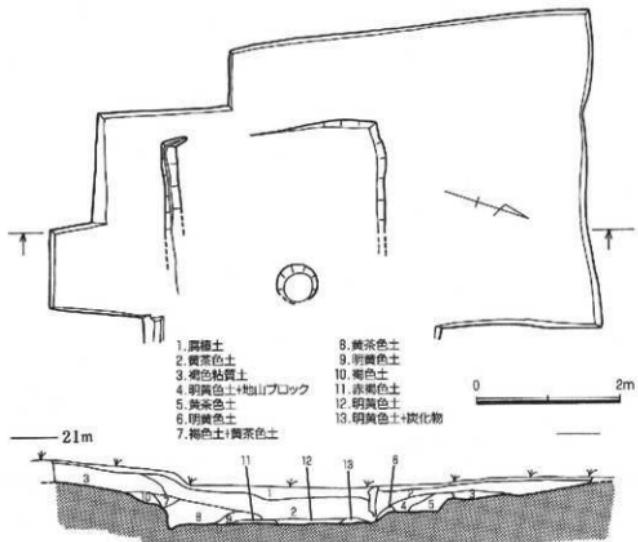
これは堅式住居跡が埋没したものと判断しトレンチを設定して調査を実施した。このトレンチでは表土約20cmを除去すると堅緻な地山が検出され、それに立ち上がり約80°の角度をもって堅穴式住居跡が掘り窪められており、床面はほぼ水平に整えられていた。住居跡壁面はトレンチの東南端から西方に向かって弧を描きながら北方に至っていた。この壁面に沿って幅5cm、深さ5cmを測る溝が認められた。またトレンチのはば中央の床面で、直径50cm、深さ65cmを測る柱穴状の坑を検出した。この遺構については完掘していないが、円形プランの堅穴式住居跡と判断された。上面の不自然な窪みからすると直径約5mの規模と推定される。この遺構からは、柱穴状の坑の南側床面に密着する形で壺形土器の口縁部片1点（第4図）が出土した。

SB02（第5図）調査区のほぼ中央の南側のトレンチで検出した堅穴式住居跡で、南北3m、東西2.6m以上の、方形プランを呈す。中央よりやや東方床面に直径50cmを測る断面皿形の坑が認められた。この部分の地山は極めて脆弱で、壁の残存高は10~15cmを測るのみであった。精査

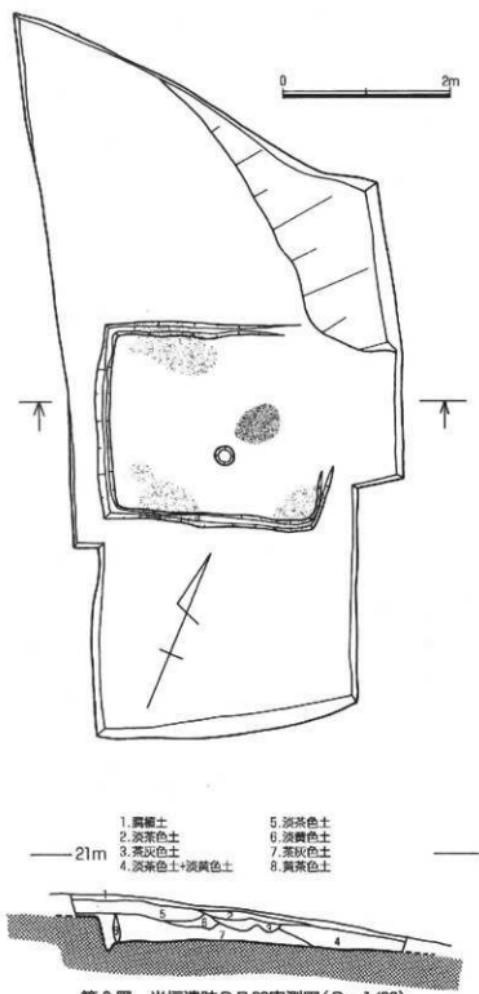
を試みたが、床面及び屋外とともに柱穴らしい痕跡は認められなかった。遺物は床面中央から若干の上器片を得た。

SB03（第6図）調査区の最も北側に設定したトレンチで検出した堅穴式住居跡で、南北2.4m、東西2.6mを測る方形プランを呈するものである。残存状況は比較的

良好で、西壁は掘り込み面から床面まで40cmを測る。その壁に沿って断面U字形を呈す幅10cmの浅い



第5図 米垣遺跡SB02実測図 (S=1/60)



第6図 米垣遺跡SB 03実測図(S=1/60)

のような例は寡聞にして知らない。何か特殊な意図のもとに建てられたものと考えられるが、今後の類例を待って検討すべきものである。

なお、SB 01については、狭いトレンチ調査であったが、残存良好な状態で埋没しているものと判断された。さらに工事の対象地との境付近に位置することなどから、関係者と協議の結果、工事の際の丘陵掘削面の勾配を調整することで現状で保存することが可能となった。

溝が走る。床面の中央やや南東よりにおいても、直径20cm、深さ25cmを測る柱穴状の坑を検出した。屋外でも精査を試みたが、柱穴等の痕跡は認められなかった。床面には中央やや東よりで直径50cmにわたって、火を受けた変色が認められた。また南西、南東、北西の各隅には厚さ10~15cmの焼土の集積が認められた。遺物は床面各所から土器片が出土した。いずれも胎土や調整などから弥生時代後期のものと推定された。

<まとめにかえて>

検出遺構は竪穴式住居跡計3棟であった。このうちSB 01は円形プランを呈することや出土土器から弥生時代後期のものと判断される。SB 02・03は方形プランを呈するもので、出土土器の胎土等からSB 01とほぼ同じ時期と解される。当地の弥生時代の竪穴式住居跡は円形、多角形、隅丸方形などのプランが知られるが、今回検出した方形プランのものは、床面積が小規模であること、柱穴等の痕跡が顕著に認められないこと等の特徴があげられ、こ

註

- (1) 加藤義成『修訂出雲國風土記研究』1957
- (2) 安来市教育委員会『小汐手遺跡・黒井田小林遺跡』1999
- (3) a 安来市埋蔵文化財調査委員会『高広遺跡（和田南地区）』 1982
b 烏根県教育委員会『高広遺跡』一和田畠地造成事業に伴う発掘調査 1984
- (4) 註(3) bと同じ
- (5) 本書、平成2年度 安来市教育委員会調査
- (6) 註(3) bと同じ
- (7) 註(2)と同じ
- (8) 本書
安来市教育委員会『長曾土墳墓群』1981
- (9) 安来市教育委員会『小汐手横穴墓群・浜崎古墳群』2000
- (10) 大谷晃二・清野孝之『安来市尾亮塚古墳の再検討』『鳥根考古学会誌』第13集 1996
- (11) 安来市教育委員会『安来市内遺跡分布調査報告』1991
- (12) 安来市教育委員会『池坪古墳群』2000
- (13) 安来市教育委員会『小馬木古墳群』1998
- (14) 註(12)と同じ
- (15) 松本岩雄『客神社跡古墳について』『ふいーると・のーと』NO.5 本庄考古学研究室 1983
- (16) 内田才『歴史・古代』『安来市史』1970
- (17) 野津左馬之助『鳥根縣史』第4巻 1925
- (18) 註(9)と同じ
- (19) 註(3) bと同じ
- (20) 註(9)と同じ
- (21) 安来市教育委員会『黒島2号横穴発掘調査報告書』1983
- (22) 山陰横穴墓研究会『第7回山陰横穴墓調査検討会 出雲の横穴墓—その型式・変遷・地域性—』1997
- (23) 註(3) bと同じ
- (24) 安来市教育委員会『長曾遺跡』1978
- (25) 註(3) bと同じ
- (26) 註(12)と同じ
- (27) 鳥根県教育委員会『鳥根県中近世城館跡調査報告第2集 出雲・隠岐の城館跡』1998
- (28) 江田哲也『戦国期の安来』『安来市誌』上巻 1999

第3章 調査の概要

第1節 長曾土壤墓群

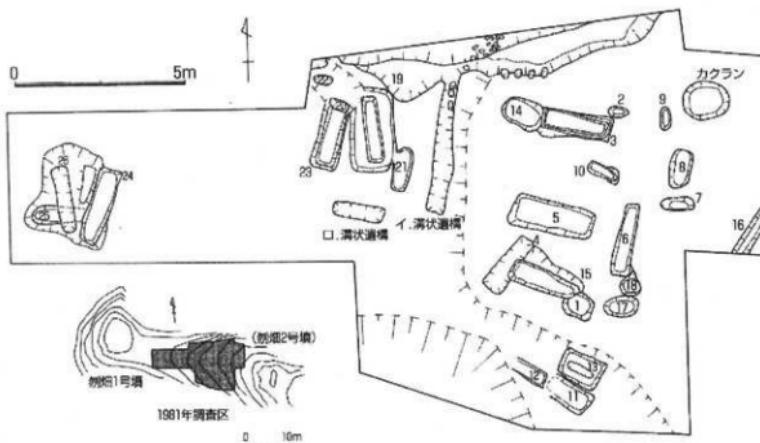
<調査前状況>

長曾土壤墓群は、南から派生する尾根が西に向きを変えた標高20~30mの丘陵の尾根上に立地する。このうち、標高約20~22mの丘陵尾根が比較的幅広くなっている部分は1981年に発掘調査が実施されている（第7図）。この調査時の遺構配置状況から、調査区外の東西に遺構が広がっていることが予想された。また、この遺構が確認された地点の東方の標高約30mの丘陵の頂部に平坦面が認められることから、事前に試掘調査を実施した。その結果、墓壙と溝状遺構を検出したことから、この丘陵頂部も併せて本調査を実施することとなった。

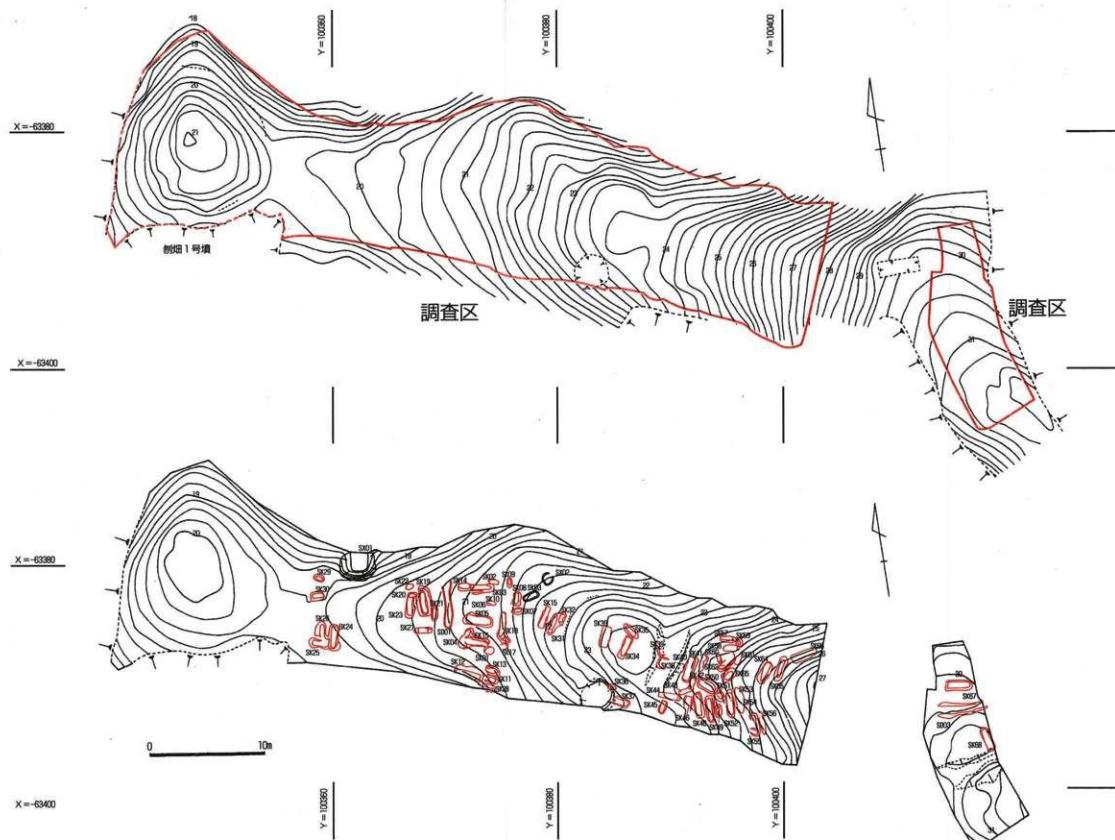
事業開始前の立木伐採する際重機が丘陵上に入っていたり、調査区の数カ所にその雑木を燃やすための穴が数カ所掘られていた。その重機の通り道の表土が若干削れており、そこのSK34・SK35付近から弥生土器を数点表探している（第32図）。

<調査の概要>

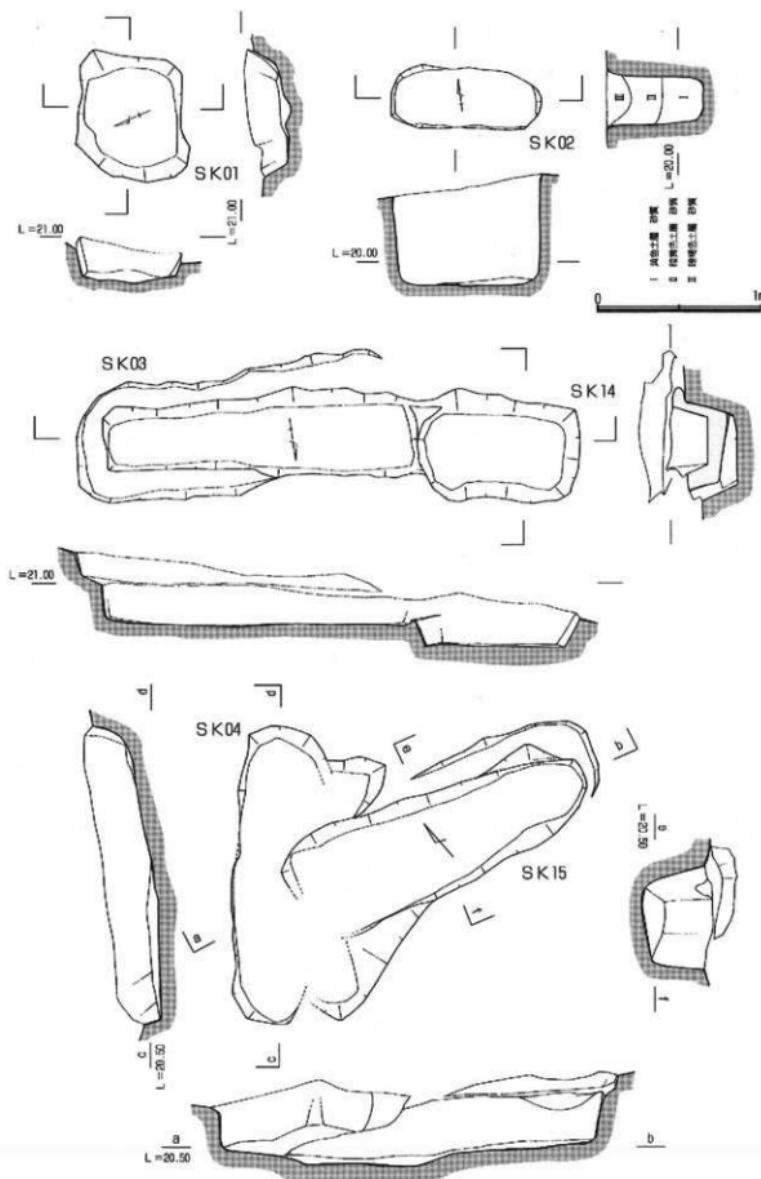
調査の結果、長曾土壤墓群は例烟1号墳の東側墳端の標高約19.5mの緩斜面から標高約30mの丘陵の頂部の長さ約6.4mにわたって広がっている。標高約27mのやや東側の比較的傾斜が強くなる場所までの調査区と丘陵頂部の調査区の間は、傾斜が急で遺構の所在する可能性が低いことや調査期間や態勢の関係などから調査を断念せざるを得なかった。



第7図 長曾土壤墓群 1981年調査区位置図・遺構配置図
(S=1/1200・S=1/150、「長曾土壤墓群」1981よりトレース)



第8図 調査前測量図（上）・弥生時代遺構配置図（下）（S=1/300）



第9図 SK01・02・03・04・14・15実測図
(S=1/30, SK02は「長曾土壤墓群」1981よりトレース)

今回の調査で検出した弥生時代後期のものと考えられる遺構は、木棺墓・土壙墓41基、溝状遺構1条である。よって長曾土壙墓群は前回の1981年の調査されたものと合わせると、木棺墓・土壙墓68基、溝状遺構2条からなることとなった。

遺構番号はSK01～SK27・SD01は1981年に既に調査された遺構で、今回再発掘を実施した。その遺構番号は『長曾土壙墓群』（安来市教育委員会、1981年）の調査範囲の土壙墓・木棺墓の番号はそのままとし（SK01～26）、新たに発見されたもしくは確認された土壙墓・木棺墓にはそれに続く番号（SK27～）を付した。溝状遺構については、イ溝状遺構についてはSD01とした。ロ溝状遺構については再調査の結果、木棺墓の可能性が高いことからSK27の番号を付している。

SK01（遺構：第9図 出土遺物：第32図13）

墓壙の平面形はやや不整形な幅広い長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根のやや南側の標高約21mに位置する。その主軸方位は尾根筋にはほぼ平行し、磁北に対する角度はN68°Wを指す。前回の調査時における規模は長軸約0.75m、短軸約0.56m、現存する深さは約0.28mを測る。また前回の調査時に墓壙の側壁を朱で塗られているのが確認されているが、今回の調査では確認することができなかった。北西隅がSK15と接しており、その切り合い関係はSK15→SK01である。

出土遺物は、前回の調査時に上層から高坏の坏部片（第29図13）が出土している。

SK02（遺構：第9図）

墓壙の平面形は梢円形に近い隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の北側の標高約19.5mに位置している。その主軸方位は尾根筋に平行し、磁北に対する角度はN79°Wを指す。前回における規模は長軸約0.90m・短軸0.34m・現存する深さは約0.52mを測る。土層は3層に分かれ、いずれも砂質土層である。

遺物は検出されなかった。

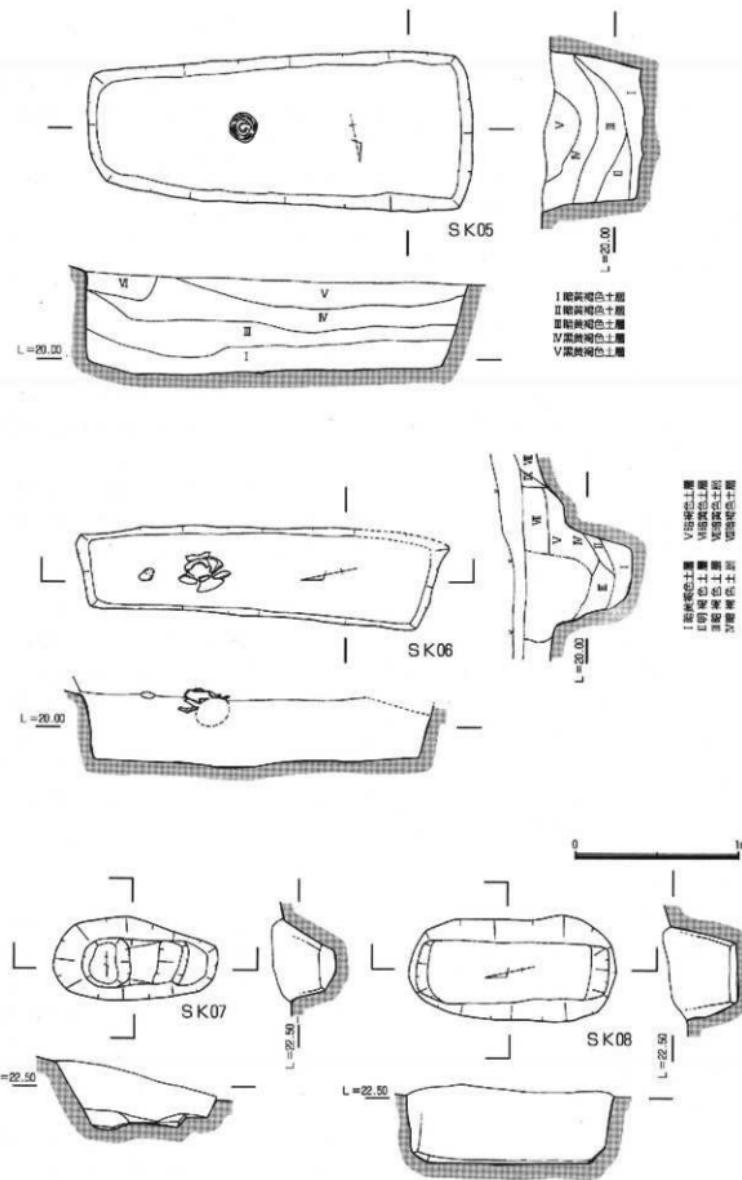
SK03（遺構：第9図）

墓壙の平面形は長方形を呈し、途中に段を有する2段掘となっている。丘陵尾根の北側の標高約21mに位置し、主軸方位は尾根筋に平行し磁北に対する角度はN78°Wを指す。規模は、墓壙1段目が長軸約2.13m・東側端部0.5m・西側端部0.7m・現存する深さ1.5m、墓壙2段目が長軸1.92m・短軸0.43m・深さ0.23mを測る。西端幅が東端と比較するとやや幅広となっていることから、被葬者の頭位は東方と推測される。墓壙東側の短軸がSK14と接しているが、その切り合い関係については不明である。

遺物は検出されなかった。

SK04（遺構：第9図）

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根のはば中央の標高約20.8mに位置する。主軸方位は等高線に対して直交し、磁北に対する角度はN42°Eを指す。規模は、長軸約1.73m・短軸は南西端で約0.90m・北西端で約0.50m、現存する深さは約0.45mを測る。墓壙は稚拙で雑なつくりのようにも観察できる。南西端が北西端と比較するとやや幅広となっていることから、被葬者の頭位は南西と推測される。長軸西側のはば中央でSK15と接しているが、その



第10図 SK05・06・07・08実測図
(S=1/30, SK05・06は「長曾土壤墓群」1981よりトレース)

遺物は検出されなかった。

SK 05 (遺構: 第10図、遺物: 第32図1)

墓壙の平面形はやや幅の広い長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の中央の標高約20.4mに位置する。主軸方位は尾根筋に平行し、磁北に対する角度はN 77° Wを指す。規模は、長軸約2.34m・短軸は西側で約0.94m・東側で約0.60m・現存する深さで約0.45mを測る。西端幅が東端と比較するとやや幅広となっていることから、被葬者の頭位は西方と推測される。墓壙底は西側端が若干高くなっている。層位は6層に分かれ、埋土は地山ブロックを多く含む。

遺物は、墓壙ほぼ中央上面より供献されたと考えられる鼓形器台が出土している(第32図1)。脚台部はゆるやかに外反し、径1.7.2cmを測る。調整は外面には16条のクシ状工具による平行沈線文が、内面は下から上方に向へラケズリ・端部はヨコナデが施されている。

この出土土器からSK 05の時期は草田編年3期と考えられる

SK 06 (遺構: 第10図、遺物: 第32図7・8、第33図1)

墓壙の平面形は長方形を呈し、1981年の調査時においてはその断面図から長軸東側は2段壠となっていたようである。丘陵尾根のほぼ中央の標高約20.2mに位置する。主軸方位は尾根の走向に対してほぼ直交し、磁北に対する角度はN 15° Eを指す。規模は、長軸で約2.20m・短軸の南側で約0.60m・北側で約0.47m・現存する深さは約0.40mを測る。底面は北側端部が低くなっている。南端幅が北端と比較してやや幅広となっていることから、被葬者の頭位は南方と推測される。墓壙南側でSK 18と接しているが、切り合ひ関係については不明である。層位は7層に分かれ、下層は地山ブロックを多く含む。

遺物は、上層の暗黄色土層より墓壙の中央のやや北側に寄った位置に、鼓形器台と鼓形器台の受け部に注口土器が乗って横転した状態で出土した。また、この土器の北側約20cmのところで標石が出土している。第31図7は注口土器で口縁部径1.6.5cmを測り、体部の上半部に注口がつく。口縁部は薄く引きのばし端部は尖り気味となり、口縁部の稜はほぼ水平に突出している。体部の調整は外面はタテハケ後クシ状工具により波状文・平行沈線文を、内面はヘラケズリを施す。8はほぼ完全に復元できる鼓形器台で、器高14.7cm・器受部径23cm・脚台部径20.6cmを測る。受部・脚台部とも大きく外反し、端部を拡張する。内面の調整は横方向にヘラケズリを施す。第32図1は標石で一部に削痕が認められた。

この供獻土器からSK 06の時期は草田編年4期と考えられる。

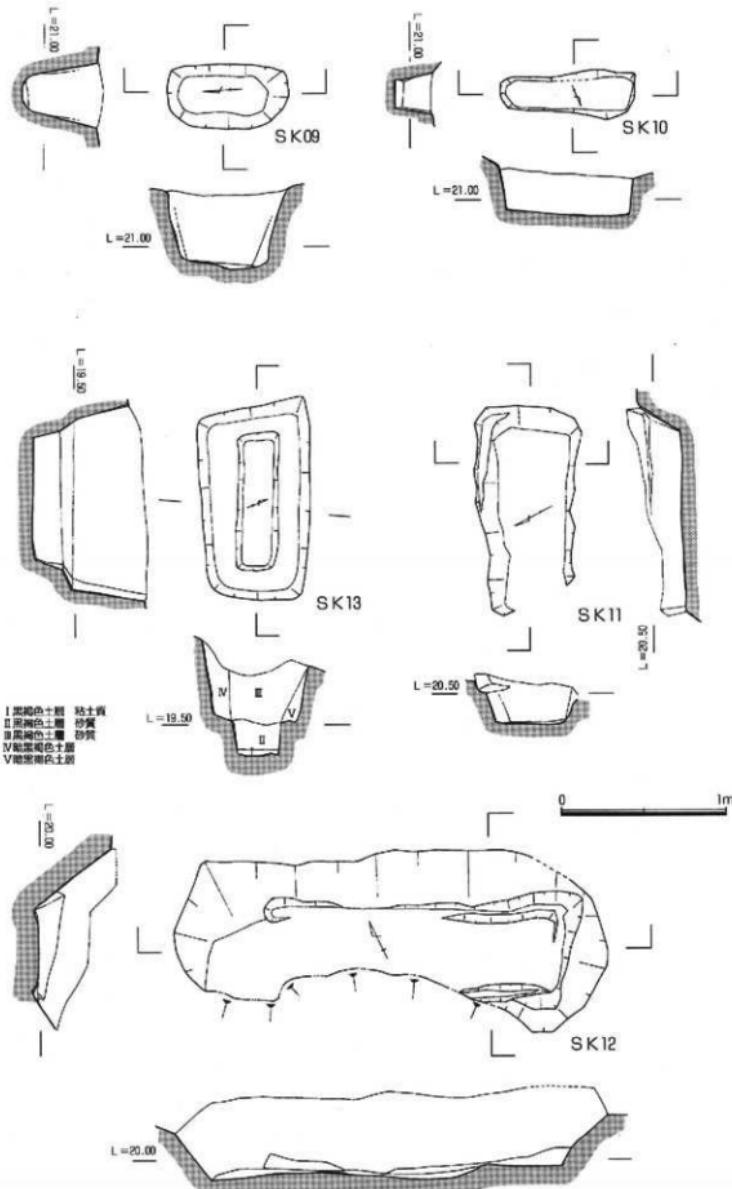
SK 07 (遺構: 第10図)

墓壙の平面形は梢円形に近い隅円長方形を呈する素掘の土壙で、墓壙底の長軸端に小口溝が認められた。丘陵尾根のほぼ中央の標高約22.5mに位置する。主軸方位は尾根筋に平行し、磁北に対する角度はN 82° Eを指す。規模は、長軸約1.00m・短軸約0.46m・現存する深さ約0.40mを測る。底面は東側が低くなっている。墓壙底東端には小口溝が認められることから、木棺墓である可能性が高い。

遺物は、検出されなかった。

SK 08 (遺構: 第10図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根のやや北側の標高約22.5mに位置する。主軸方位は尾根の走向に直交し、磁北に対する角度はN 16° Eを指す。規模は、長軸約0.



第11図 SK09・10・11・12・13実測図
(S=1/30, SK13は「長曾土壤墓群」1981よりトレース)

7.3m・短軸約0.50～0.60m・現存する深さ約0.55mを測る。底面はほぼ水平である。

遺物は、検出されなかった。

SK 109 (遺構: 第11図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の北側の標高約21.3mに位置する。主軸方位は尾根の走向に対して直交し、磁北に対する角度はN 9.5° Eを指す。1981年の調査時においては、南側が浅い2段壠の墓壙を呈していたようである。規模は、長軸約0.73m・短軸約0.36m・現存する深さ約0.46mを測る。層位は2層に分かれていたようで、底面は北側が低くなっている。

遺物は、検出されなかった。

SK 110 (遺構: 第11図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根のほぼ中央の標高約21.2mに位置する。主軸方位は尾根筋に平行し、磁北に対する角度はN 6.6° Wを指す。1981年の調査時においては、東側のみ浅い2段壠の墓壙を呈していたようである。規模は、長軸約0.80m・短軸は西側約0.25m・東側約0.22m・現存する深さ約0.25mを測る。層位は2層に分かれていたようで、底面はほぼ水平である。

遺物は、検出されなかった。

SK 111 (遺構: 第11図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈し、北東隅付近の一部は2段壠となっている。丘陵尾根の南側の標高約20.5mに位置する。主軸方位は尾根筋に平行し、磁北に対する角度はN 6.9° Wを指す。規模は、長軸約1.28m・短軸は東側端部で約0.50m・西側端部で約0.40m・現存する深さ約0.28mを測る。層位は単層であったようで、底面はほぼ水平である。

遺物は、検出されなかった。

SK 112 (遺構: 第12図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の南側の標高約20.3mに位置する。主軸方位は尾根筋に平行し、磁北に対する角度はN 6.9° Wを指す。規模は、長軸約1.60m・短軸は東端で約0.60m・西端で約0.45m・現存する深さで約0.60mを測る。墓壙底の端に浅い溝が掘られていることから、木棺墓である可能性が高い。

遺物は、検出されなかった。

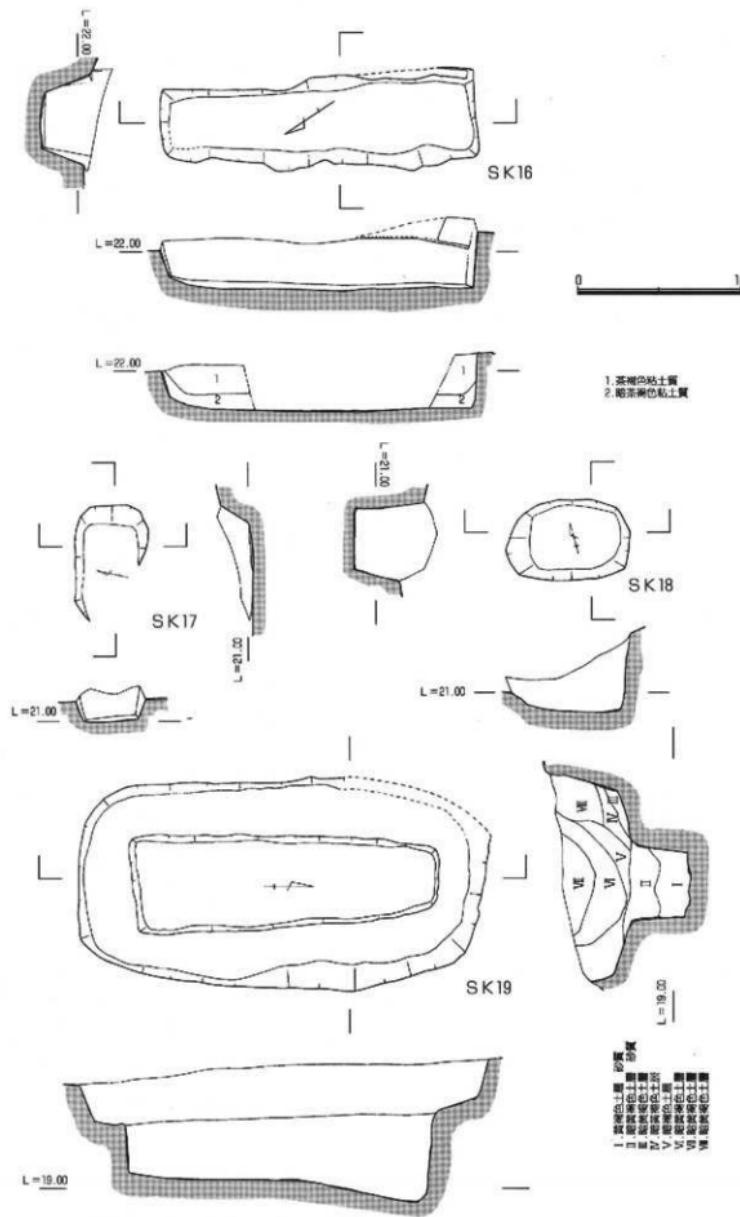
SK 113 (遺構: 第11図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈し、途中に段を有する2段壠となっている。丘陵尾根の南側の標高約19.9mに位置する。主軸方位は尾根筋に平行し、磁北に対する角度はN 67.5° を指す。規模は、墓壙1段目が長軸約1.25m・短軸約0.74m・深さ約0.60m、墓壙2段目が長軸約0.85m・短軸0.28m・深さ約0.20mを測る。層位は底面に粘土層があり、その上は砂層であったようで、墓壙底はほぼ水平である。墓壙断面図から裏込め土と推定される上層が観察されることから、木棺墓と考えられる。

遺物は、検出されなかった。

SK 114 (遺構: 第9図)

平面形はやや幅広い長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の北側の標高約19.9mに位置する。



第12図 SK 16・17・18・19実測図
($S=1/30$, SK 19は「長曾土壤堆群」1981よりトレース)

主軸方位は尾根筋に平行し、磁北に対する角度はN 77° Eを指す。規模は長軸約1.00m・短軸約0.70m・現存する深さが約0.30mを測る。墓壙南側でSK03と接しているが、切り合い関係については不明である。層位は地山ブロックを含む砂層が3層に分かれていた。

遺物は、検出されなかった。

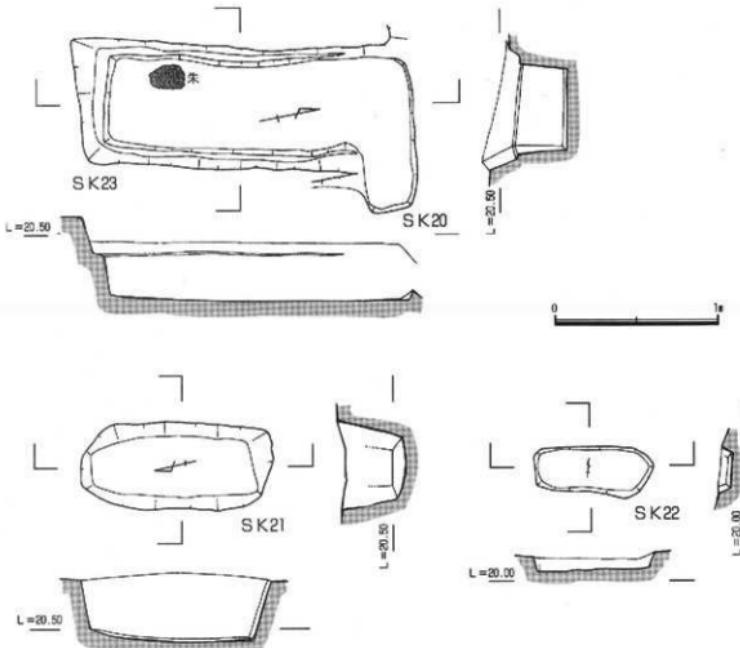
SK15（遺構：第9図）

墓壙の平面形は長方形を呈し、東北の角を中心に2段壠となっている。丘陵尾根のやや南側の標高約20.8mに位置する。主軸方位は尾根筋に平行し、磁北に対する角度はN 68° Wを指す。規模は墓壙1段目が長軸約2.05m・東側の現存する短軸が約0.7m・現存する深さ約0.2m、墓壙2段目が長軸約1.95m・短軸は西端で約0.70m・東端で約0.50m・深さ約0.45mを測る。西端幅が東端と比較するとやや幅広となっていることから、被葬者の頭位は西方と推測される。前回の調査の報告書で棺（墓壙2段目）の壁がやや湾曲しているとの記述があったが、今回の調査でそれは埋土を掘り足らなかつたためと判明した。

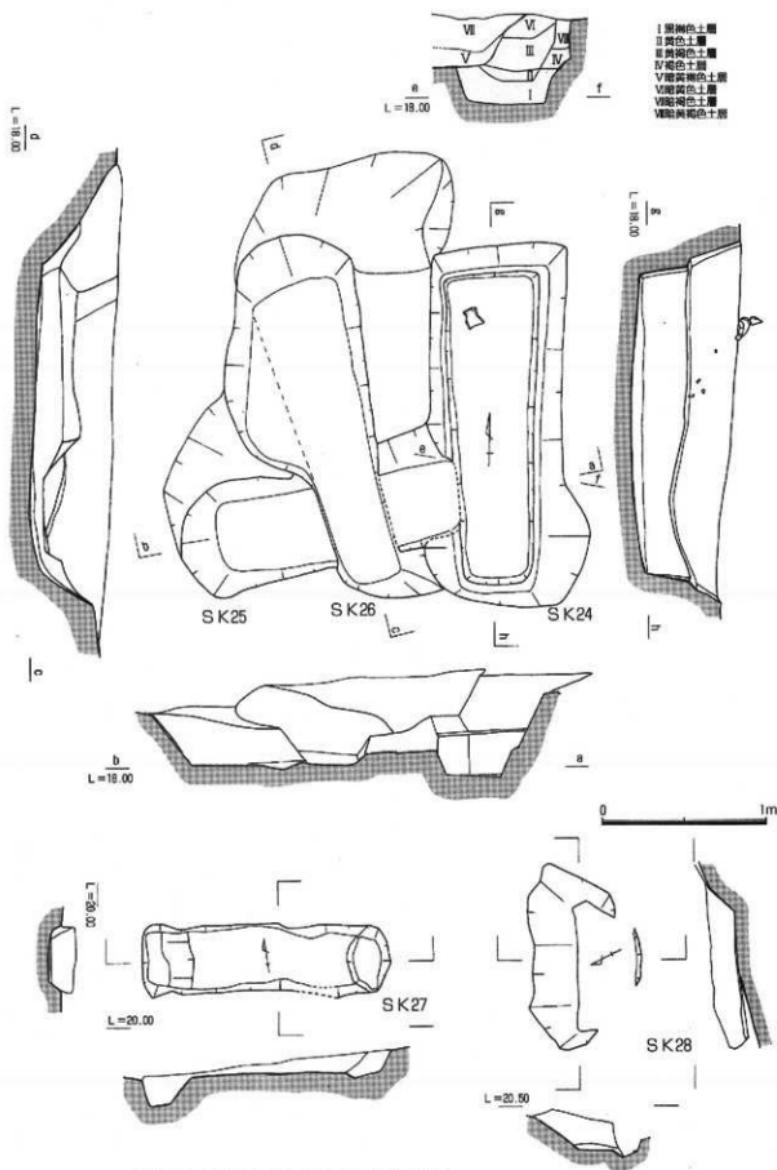
遺物は、検出されなかった。

SK16（遺構：第12図）

墓壙の平面形は長方形を呈し、南東隅付近が一部2段壠となっている。丘陵尾根のはば中央の標高



第13図 SK20・21・22・23実測図
(S=1/30, SK20-21-23は『長曾土壙墓群』1981よりトレース)



第14図 SK24・25・26・27・28実測図
(S=1/30, SK24・25・26は『長曾土壤墓群』1981よりトレース)

高約22.0mに位置する。主軸方位は尾根の走向に対して直交し、磁北に対する角度はN36°Eを指す。墓壙1段目の長軸1.93m・短軸南側が0.55m、短軸北側が0.43m・深さ0.17m、墓壙2段目が長軸1.84m・短軸北端0.44m・南端0.50m・深さ約0.3mを測る。南端幅が北端と比較してやや幅広となっていることから、被葬者の頭位は南方と推定される。前回の調査では土層は3層に分かれていたが、今回の調査では2層に分かれているように観察された。

遺物は検出されなかった。

SK17（遺構：第12図）

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の中央のやや南側の標高約21.1mに位置する。墓壙の北西隅がSK18と接しているが、その切り合い関係は不明である。主軸方位は尾根筋に平行し、磁北に対する角度はN90°Wを指す。規模は、長軸約1.00m・短軸約0.55m・現存する深さ約0.40mを測る。墓壙底はほぼ水平である。

遺物は検出されなかった。

SK18（遺構：第12図）

墓壙の平面形は楕円形に近い隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の中央のやや南側の標高約21.4mに位置する。墓壙の北側と南側がそれぞれSK06とSK17と接しているが、その切り合い関係は不明である。規模は、長軸約0.62m・短軸約0.40m・現存する深さ約0.54mを測る。墓壙底は水平である。

遺物は検出されなかった。

SK19（遺構：第12図、遺物：第32図2～4・第33図2）

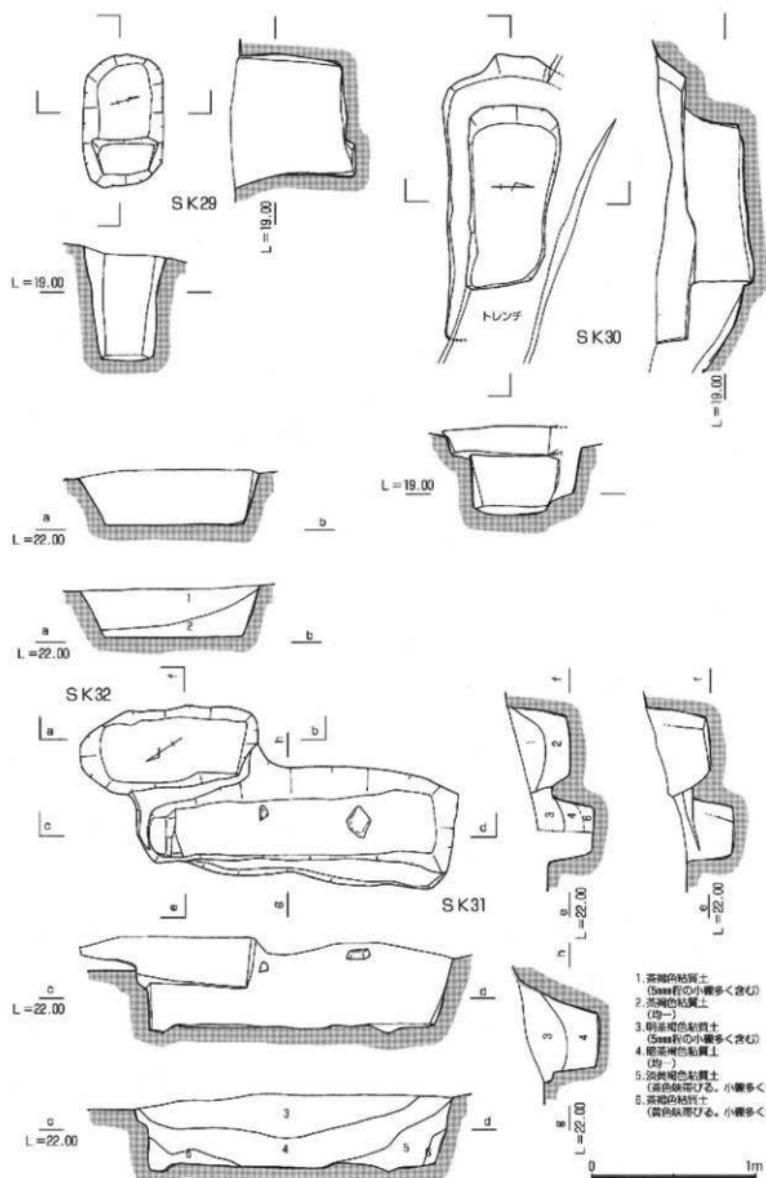
丘陵尾根の中央やや北側の標高約19.7mに位置する。墓壙は整った2段壙となっており、平面形は1段目が隅円方形・2段目が長方形を呈する。主軸方位は尾根の走向に対して直交し、磁北に対する角度はN3°Wを指す。規模は、1段目の長軸約2.50m・短軸約1.40m・深さ0.32m、2段目の長軸約1.80m・短軸の南端約0.50m・北端約0.40m・深さ約0.38mを測る。南端幅が北端と比較してやや幅広となっていることから、被葬者の頭位は南方と推測される。墓壙底は南側が北側に比べ低くなっている。墓壙断面図から裏込め土と推定される上層が観察されることから木棺墓と考えられる。

遺物は墓壙上面より鼓形器台2個体・壺・標石と考えられる砥石が出土している。「長曾上墳墓群」1981によれば壺の上に器台・壺石が壊されて混かれ、また周辺に破片が散らばっている状態で出土した。第31図2は複合口縁を呈する壺で、口径16cmを測る。口縁部は薄く引きのぼし、稜はほぼ水平に突出している。体部の調整は外面はクシ状工具により平行沈線文を、内面はヘラケズリを施す。胴部内面には朱が付着している。3・4は鼓形器台である。3は器高14.6cm・器受部径18.6cm・脚台部径17.6cmを測る。受部・脚台部ともゆるやかに外反し、端部を拡張する。4は筒部の破片である。第32図2は標石と考えられる砥石である。

この供獻土器からSK19の時期は草田編年5期と考えられる。

SK20（遺構：第13図）

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の中央やや北側の標高約20.5mに位置する。主軸方位は尾根筋に平行し、磁北に対する角度はN85°Wを指す。規模は、長軸約0.80m・短軸約0.45m・現存する深さ約0.45mを測る。墓壙の西側から南側にかけてSK23



第15図 SK29・30・31・32実測図 (S=1/30)

と接しているが、切り合い関係は不明である。

遺物は検出されなかった。

SK 21 (遺構: 第13図)

墓壙の平面形は隅円方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の中央やや北側の標高約20.8mに位置する。主軸方位は尾根の走向に対して直交し、磁北に対する角度はN15°Eを指す。規模は、長軸約1.15m・短軸約0.50m・現存する深さ約0.30mを測る。層位は2層に分かれ、上層は地山ブロックを含む。墓壙底は南側が低くなっている。

遺物は検出されなかった。

SK 22 (遺構: 第13図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の北側の標高約20.1mに位置する。主軸方位は尾根筋に平行し、磁北に対する角度はN90°Wを指す。規模は、長軸約0.60m・短軸約0.33m・現存する深さ約0.07mを測る。

遺物は検出されなかった。

SK 23 (遺構: 第13図)

墓壙の平面形は長方形を呈し、北側辺は失われているが整った2段壠となっている。丘陵尾根の中央やや北側の標高約20.5mに位置する。主軸方位は尾根の走向に対して直交し、磁北に対する角度はN11°Eを指す。規模は墓壙1段目の長軸1.7m以上・短軸約0.79m・現存する深さ約0.22m、2段目の長軸1.55m以上・短軸約0.59m・深さ0.37mを測る。前述のように墓壙北側はSK 20によって失われているが、その切合関係は不明である。墓壙底の南やや西側から朱が検出された。

遺物は検出されなかった。

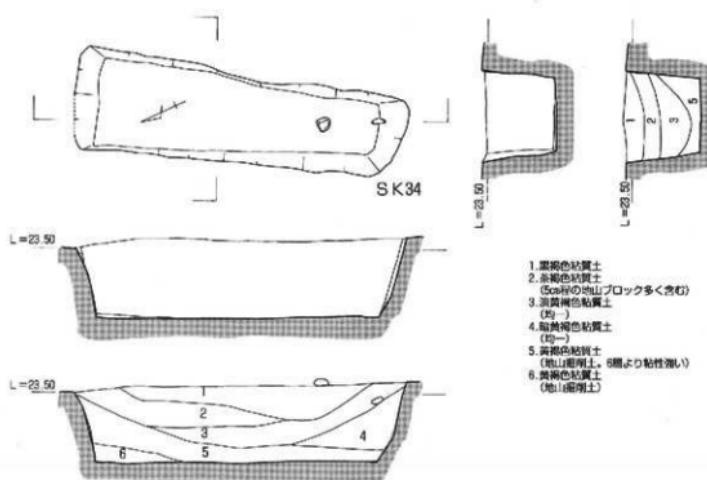
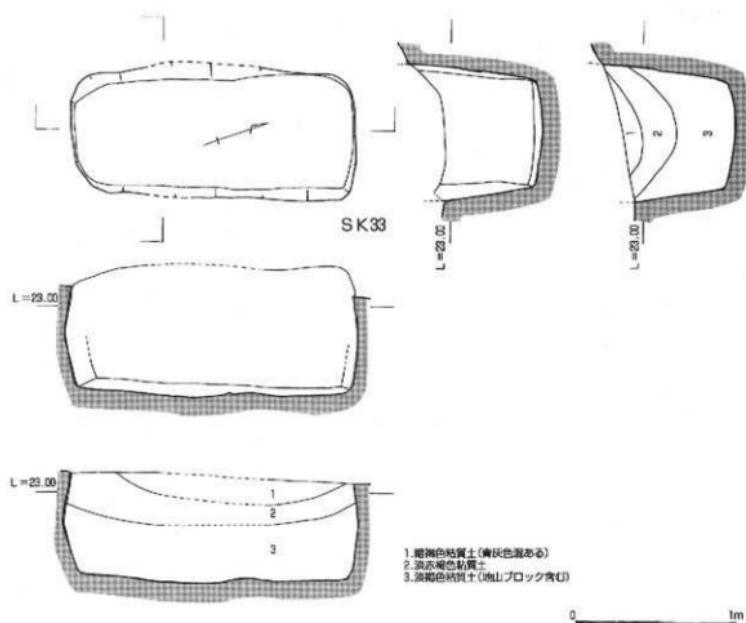
SK 24 (遺構: 第14図、遺物: 第32図9~11)

墓壙の平面形は長方形を呈し、整った2段壠となっている。SK 24~SK 26の3基の土壙が切り合って所在し、「長曾土壙墓群」1981では西側土壙墓群とされていた。丘陵尾根の南側の標高約18.5mに位置する。主軸方位は尾根の走向に直交し、磁北に対する角度はN13.5°Eを指す。規模は1段目長軸約2.35m・短軸北端約0.80m・南端約0.60m・現存する深さ0.33m、2段目長軸1.95m・短軸北端0.57m・南端0.42m・深さ0.32mを測る。北端幅が南端と比較してやや幅広となっていることから、被葬者の頭位は北方と推測される。西辺がSK 25と接しているが、その切り合い関係は土壙図からSK 24→SK 25である。

遺物は覆土上層よりレベル的にばらついた状態で手握の壺・壺・高坏が出土している。第29図9は吉備系の壺で口径14cmを測る。口縁部は短く立ち上がり、頸部外面に一本ずつ凹線文を施している。胎土は他の土器と違ひ暗褐色を呈している。10は手握の小型の壺で、口縁部はつまみ上げて外反する。風化が著しく調整等は不明である。11は高坏の脚部で、下方にゆるやかに外反する。調整は外面は縦方向に細かなミガキ、内面は綫方向にヘラケズリが施されている。

SK 25 (遺構: 第14図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の南側の標高約18.4mに位置する。主軸方位は尾根筋に平行で、磁北に対する角度はN87°Wを指す。規模は、長軸1.70m以上・短軸東端0.60m・西端0.40m・現存する深さ0.40mを測る。墓壙底に暗黄褐色の粘土を施



第16図 SK33・34実測図 (S=1/30)

してあった。墓壙中央部と西端部がそれぞれSK26とSK24と交わっているが、それぞれの切合関係はSK26→SK25・SK24→SK26である。

遺物は検出されなかった。

SK26（遺構：第14図）

墓壙の平面形は隅円方形を呈し、丘陵尾根のやや南側の標高約18.3mに位置する。主軸方位は尾根の走向に対して直交し、磁北に対する角度はN5°Wを指す。規模は、長軸2.40m・短軸北端0.60m・南端0.40m・現存する深さ0.45mを測る。北端幅が南端と比較してやや幅広となっていることから、被葬者の頭位は北方と推測される。前回の調査の報告書では2段壙となっているが素掘のように観察される。墓壙南端付近がSK25と交わっているが、その切合関係はSK26→SK25である。

遺物は検出されなかった。

SK27（遺構：第14図、遺物：第32図12）

前回の調査の報告書の中で、「口溝状遺構」となっていた遺構である。今回再調査したところ、墓壙底端部で小口溝が両端で検出されたことから木棺墓とした。墓壙の平面形は長方形を呈し、丘陵尾根のほぼ中央の標高約20.6mに位置する。主軸方位は尾根に平行し、磁北に対する角度はN80°Wを指す。規模は長軸15.1m・短軸0.40m・現存する深さ0.10mを測る。墓壙底の両端にある小口溝は、東側・西側それぞれ深さ0.16m・0.04mを測る。小口溝が確認されたことから、木棺墓である可能性が高い。

遺物は、墓壙の中央のやや西側の位置で低脚壺が出土している（第29図）。風化が著しく調整等は不明である。

SK28（遺構：第14図）

SK11の南側で検出された墓壙の平面形が隅円長方形を呈すると考えられる素掘の土壙で、丘陵尾根の南側の標高約20.5mに位置する。主軸方位は尾根に平行し、磁北に対する角度はN66°Wを指す。規模は、長軸1.13m・現存する短軸0.65m・現存する深さ0.16mを測る。

遺物は検出されなかった。

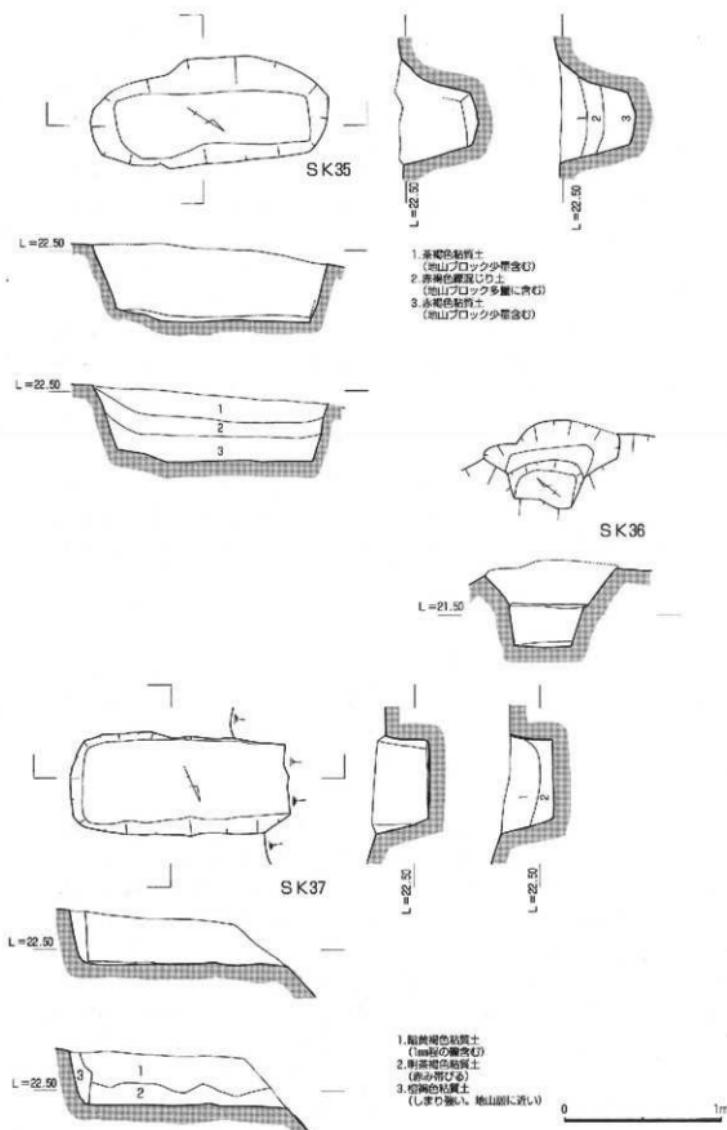
SK29（遺構：第15図）

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の北側の標高約19.3mに位置する。主軸方位は尾根の走向に平行し、磁北に対する角度はN74°を指す。規模は、長軸0.80m・短軸0.50m・現存する深さ0.70mを測る。墓壙底東端に小口溝状の坑が見られるが、これは掘りすぎの可能性がある。

遺物は検出されなかった。

SK30（遺構：第15図）

墓壙の平面形は隅円長方形を呈し、整った2段壙の墓壙になっている。この墓壙は劍畠1号墳の墳丘断面のトレチの延長上で検出されたため、墓壙北側が損なっている。丘陵尾根のやや北側の標高約19.4mに位置する。主軸方位は尾根の走向に対して直交し、磁北に対する角度はN88°Eを指す。規模は1段目が長軸1.76m・短軸0.65m以上・現存する深さ0.20m、2段目は長軸1.10m・短軸西端0.56m・東端0.46m・深さ0.36mを測る。西端幅が東端と比較してやや幅広となっていることから、被葬者の頭位は西方と推測される。



第17図 SK35・36・37実測図 (S=1/30)

遺物は検出されなかった。

SK 3 1 (遺構: 第15図、遺物: 第33図3・4)

墓壙の平面形は長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根のほぼ中央の標高約22.1mに位置する。墓壙の北側と西側が2段壠となっている。主軸方位は尾根の走向に対して直交し、磁北に対する角度はN30°Eを指す。規模は1段目の長軸1.93m・短軸0.64m・現存する深さ約0.1m、2段目の長軸1.85m・短軸南端0.55m・東端0.37m・西側の深さ0.25mを測る。東端幅が西端と比較してやや幅広となっていることから、被葬者の頭位は東方と推測される。墓壙底北側に小口溝が認められることや墓壙断面図から裏込め土と推定される土層が観察されることから木棺墓と考えられる。墓壙北東辺がSK 3 2と接しており、その切合関係はSK 3 1→SK 3 2である。

遺物は墓壙上層より標石が2個出土している。第33図3は墓機上面のやや南側で出土した、方形の扁平な板状で角が丸くなっている川原石である。長さ14.8×14.5cm・厚さ4.4cmを測り、扁平な面(片面)とその側壁の対極に断面U字状の使用痕が認められることから台石もしくは砾石と考えられる。4は墓壙上面のやや北側から直立した状態で出土した、橢円形状の河原石を半分に割ったものである。長さ7.1cm・幅8.1cm・厚さ5.0cmを測り、端部に擦痕が観察される。

SK 3 2 (遺構: 第15図)

墓壙の平面形は隅円方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根のほぼ中央の標高約22.4mに位置する。主軸方位は尾根の走向に対して直交し、磁北に対する角度はN30°Eを指す。規模は、長軸1.10m・短軸0.51m・現存する深さ0.3mを測る。墓壙西側がSK 3 1と接しており、その切合関係はSK 3 1→SK 3 2である。

遺物は検出されなかった。

SK 3 3 (遺構: 第16図、遺物: 第31図9・15)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の中央の標高約23.2mに位置する。主軸方位は尾根の走向に対して直交し、磁北に対する角度はN21°Eを指す。規模は、長軸1.77m・短軸0.84m・深さ0.80mを測る。

遺物は、第29図の遺物出土状況から第31図9・15がこのSK 3 3に伴う可能性がある。

SK 3 4 (遺構: 第16図、遺物: 第33図5・6)

墓壙の平面形は長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根のほぼ中央の標高約23.5mに位置する。主軸方位は尾根の走向に対して直交し、磁北に対する角度はN30°Eを指す。規模は、長軸2.05m・短軸北側0.62m・南側0.53m・現存する深さ0.47mを測る。北端幅が南端と比較してやや幅広となっていることから、被葬者の頭位は北方と推定される。墓壙北側がSK 3 5と接しているが、その切合関係は不明である。

遺物は墓壙上面とやや内側に落ち込んだ状態で検出された標石が2個出土している。第33図5は墓壙上面から検出された7.6×6.6cmを測る不整形の円礫で、一部に赤色顔料が付着しているのが観察される。6は墓壙のやや内側の4層の上面で検出された6.8×3.2cmを測る河原石で、使用痕などは認められない。

SK 3 5 (遺構: 第17図、遺物: 第31図2・3) 墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根のやや北側の標高約22.5mに位置する。主軸方位は丘陵尾根筋に斜行し、磁北に対する角度はN34°Wを指す。規模は、長軸1.50m・短軸0.67m・現存する深さ0.46m

を測る。墓壙の南東部がSK34と接しているが、その切合関係は不明である。

遺物は第31図2・3がこのSK35に伴う可能性がある。いずれも壺で、吉備系の遺物と考えられる。

SK36（遺構：第17図）

SK36は調査前に削平を受けており、北端部がわずかに残存するに過ぎない。墓壙の平面形は隅円長方形を呈し、丘陵尾根の南側の標高約21.8mに位置し、端正な2段壠となっている。主軸方位は尾根筋に平行し、磁北に対する角度はN63°Eを指す。規模は、1段目の長軸0.56m以上・幅0.85m・現存する深さ0.31m、2段目の長軸0.32m以上・短軸0.49m以上・深さ0.26mを測る。

遺物は検出されなかった。

SK37（遺構：第17図）

墓壙の平面形は隅円方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の南側の標高約22.8mに位置する。SK36と同様に調査前に墓壙の西端が削平を受けている。主軸方位は尾根筋に平行し、磁北に対する角度はN65°Wを指す。規模は、長軸残存長1.38m・短軸0.60m・現存する深さ0.32mを測る。墓壙断面図から裏込め土と推定される土層が観察されることから木棺墓と考えられる。

遺物は検出されなかった。

SK38（遺構：第18図）

墓壙の平面形は長方形を呈すると思われるが、墓壙上面が8世紀中葉から後半にかけての溝状遺構SD02によって切られているためその平面形は不明である。丘陵尾根の中央の標高約24.1mに位置する。主軸方位は尾根の走向に対して直交し、磁北に対する角度はN24°Wを指す。規模は、長軸の残存長2.34m・短軸の残存長0.86m・残存する深さ0.26mを測る。墓壙底の端に浅い溝が掘られていることから、木棺墓である可能性が高い。

遺物は検出されなかった。

SK39（遺構：第18図）

SK38と同様SD02によって墓壙が切られており、わずかに西端が残存しているに過ぎない。墓壙の平面形は隅円方形を呈すると考えられ、丘陵尾根のやや北側の標高約23.6mに位置する。主軸方位は丘陵尾根には斜行し、磁北に対する角度はN84°Wを指す。

遺物は検出されなかった。

SK40（遺構：第18図）

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根のほぼ中央の標高約24.1mに位置する。主軸方位は尾根の走向に対して直交し、磁北に対する角度はN57°Eを指す。墓壙の西側壁がSD02によって切られている。規模は、長軸2.26m・短軸0.70m・現存する深さ約0.5mを測る。墓壙底の中心と東壁沿いに主軸方位に浅い溝が掘られている。

遺物は検出されなかった。

SK41（遺構：第18図）

墓壙の平面形は隅円長方形に呈する素掘の土壙で、丘陵尾根のほぼ中央の標高約24.8mに位置する。主軸方位は等高線に平行し、磁北に対する角度はN32°Eを指す。墓壙がSD02によって切られている。現存する規模は、長軸1.47m・短軸0.55m・深さ0.28mを測る。

遺物は検出されなかった。

SK 42 (遺構: 第19図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根のやや南側の標高約24.5mに位置する。主軸方位は等高線に平行し、磁北に対する角度はN 33° Eを指す。規模は、長軸1.10m・短軸0.44m・現存する深さ0.48mを測る。墓壙南側がSK 43に交わっており、その切合関係はSK 43→SK 44である。

遺物は検出されなかった。

SK 43 (遺構: 第19図)

墓壙の平面形は長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根のやや南側の標高約24.5mに位置する。主軸方位は等高線に対して直交し、磁北に対する角度はN 11° Eを指す。規模は、長軸1.31m・短軸0.38m・現存する深さ0.20mを測る。墓壙西側がSK 42と交わっており、その切合関係はSK 43→SK 42である。

遺物は検出されなかった。

SK 44 (遺構: 第19図)

墓壙の平面形は長方形を呈し、墓壙の短軸東側のみが2段壠となっている。丘陵尾根の南側の標高約24.2mに位置する。主軸方位は等高線に対して直交し、磁北に対する角度はN 17° Wを指す。規模は、長軸の1段目1.95m・2段目1.74m・短軸東端0.53・西端0.39m・深さ1段目0.23m・2段目0.31mを測る。東端幅が西端と比較してやや幅広となっていることから、被葬者の頭位は東方と推定される。

墓壙内上部に落ち込んでいる状態の角礫を2個検出しており、標石の可能性がある。しかし、使用痕などは認められず、遺跡周辺で見られる角礫のようにも見受けられた。

SK 45 (遺構: 第19図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の南側の標高約23.4mに位置する。主軸方位は等高線に対して直交し、磁北に対する角度はN 27° Eを指す。規模は、長軸1.13m・短軸0.53m・現存する深さ0.45mを測る。

遺物は検出されなかった。

SK 46 (遺構: 第20図)

墓壙の南側が流失しているが平面形は隅円長方形を呈すると考えられる素掘の土壙で、丘陵尾根の南側の標高約24.5mに位置する。主軸方位は等高線に対して直交し、磁北に対する角度はN 18° Eを指す。規模は、長軸は1.23m以上・短軸0.74m・現存する深さ0.43mを測る。

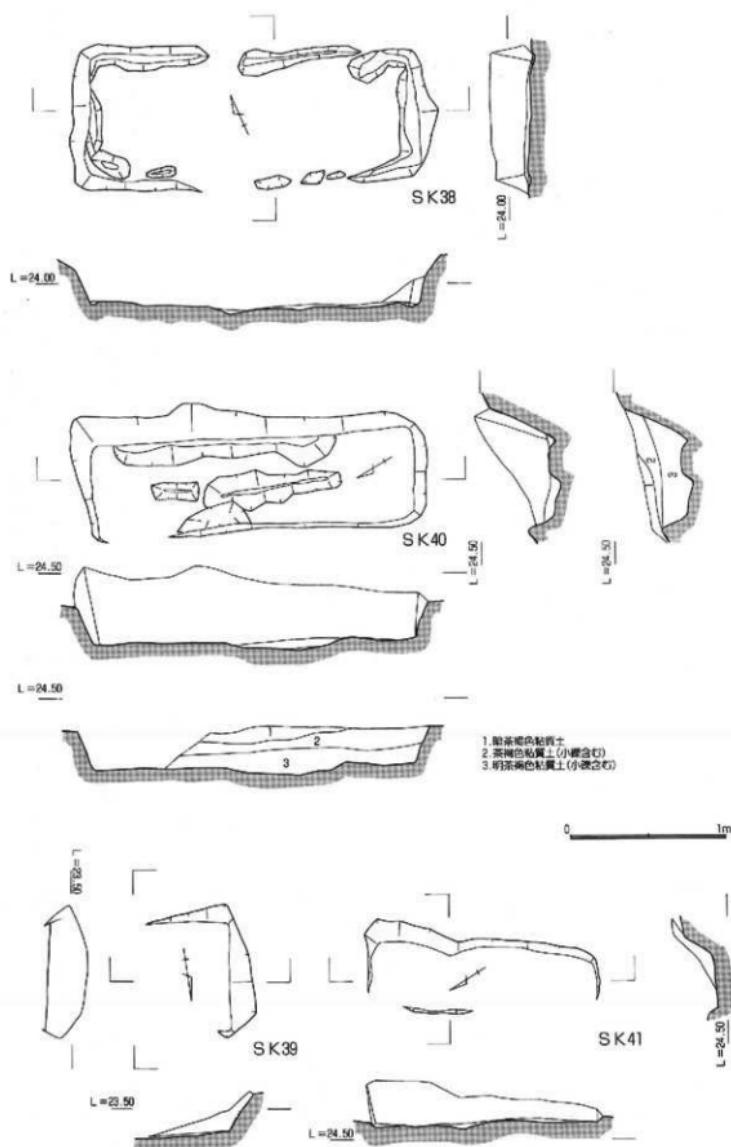
遺物は検出されなかった。

SK 47 (遺構: 第20図)

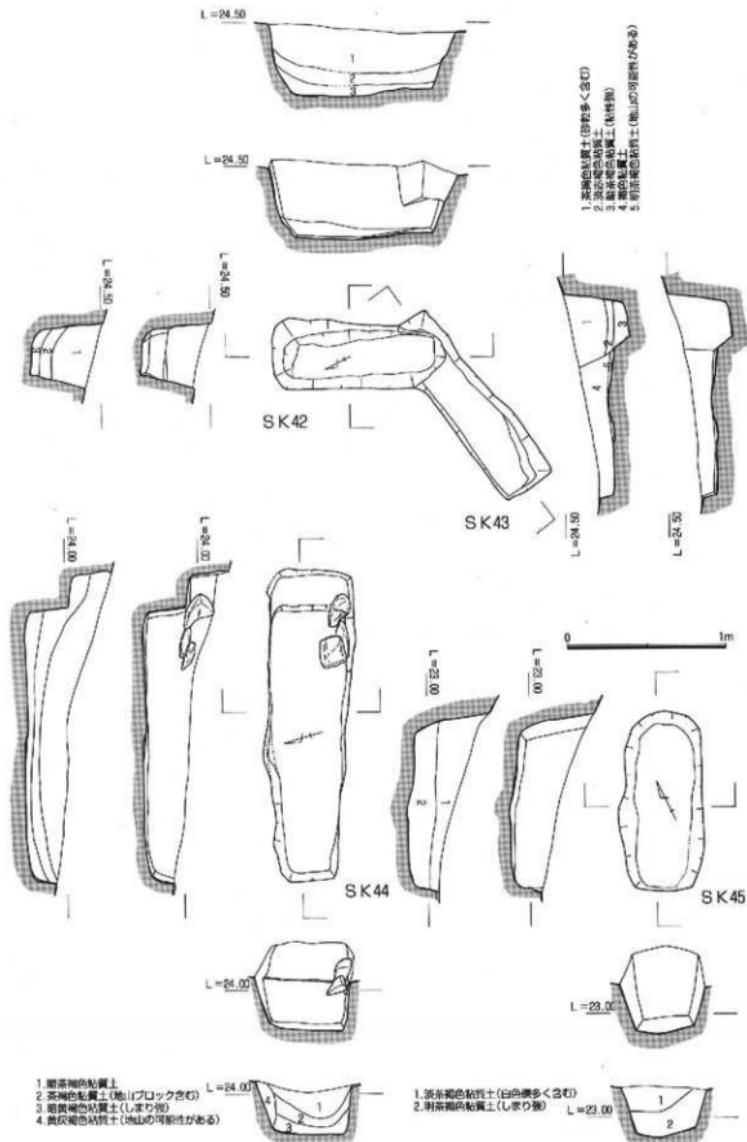
墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の南側の標高約24.5mに位置する。主軸方位は等高線に対してやや平行し、磁北に対する角度はN 3° Wを指す。規模は、長軸2.15m・短軸南端0.76m・北端0.67m・現存する深さ0.66mを測る。南端幅が北端と比較してやや幅広くなっていることから、被葬者の頭位は南方と推定される。

遺物は検出されなかった。

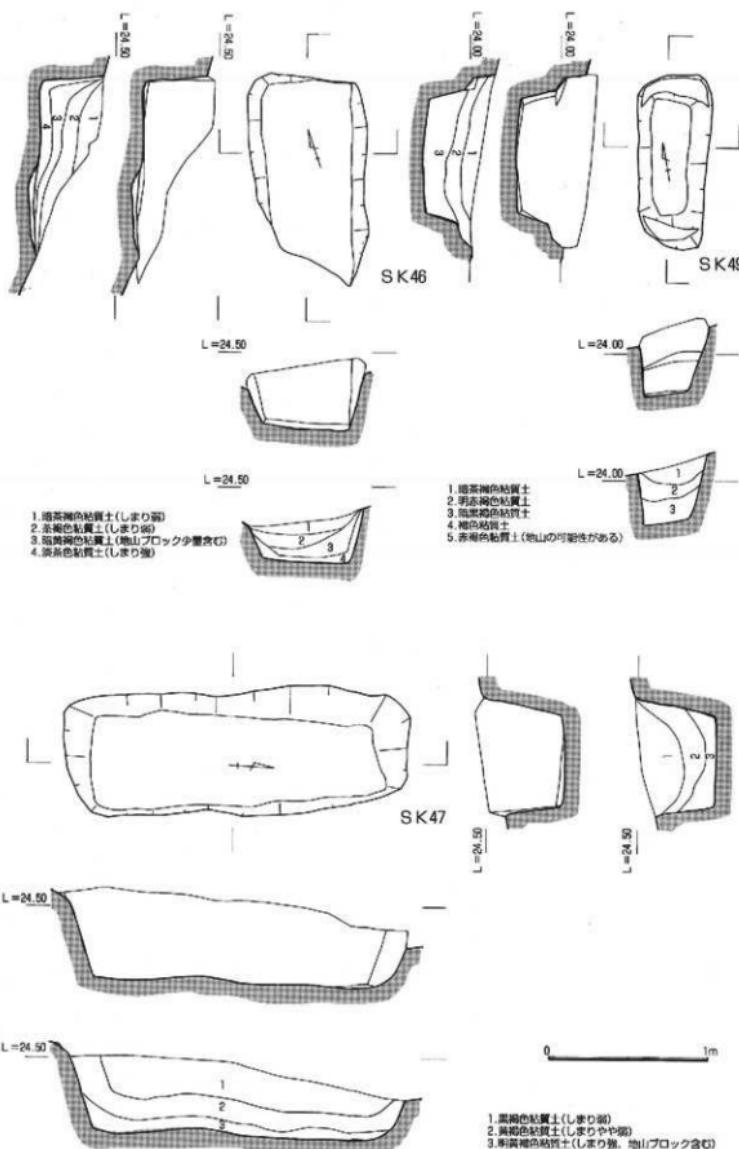
SK 48 (遺構: 第21図)



第18図 SK38・39・40・41実測図 (S = 1/30)



第19図 SK42・43・44・45実測図 (S=1/30)



第20図 SK 46・47・49実測図 (S=1/30)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈し、現状では西側のみ2段堀となっている。丘陵尾根の南側の標高約24.2mに位置する。主軸方位は等高線に対してやや平行し、磁北に対する角度はN2°Wを指す。規模は、1段目長軸2.16m・短軸北端0.75m・南端0.46m・現存する深さ0.18m・2段目短軸南端0.70m・深さ0.27mを測る。北端幅が南端と比較してやや幅広となっていることから、被葬者の頭位は北方と推定される。

遺物は検出されなかった。

SK 49（遺構：第20図）

墓壙の平面形は隅円長方形を呈し、墓壙の北端・南端が2段堀となっている。丘陵尾根の南側の標高約24.1mに位置する。主軸方位は等高線に対してやや平行し、磁北に対する角度はN9°Eを指す。規模は長軸1段目1.08m・2段目0.82m・短軸0.44m・現存する1段目の深さ0.12m・2段目の深さ0.22mを測る。

遺物は検出されなかった。

SK 50（遺構：第21図）

墓壙の平面形は隅円長方形を呈し、西側は失われているが断面は整った2段堀となっている。丘陵尾根の中央やや南側の標高約25.0mに位置する。主軸方位は等高線に対してほぼ平行し、磁北に対する角度はN29°Wを指す。規模は、1段目の長軸1.81m以上・短軸0.96m・現存する深さ0.31m・2段目の長軸1.65m・短軸東端0.68m・西端0.58m・深さ0.22mを測る。東端幅が西端と比較してやや幅広となっていることから、被葬者の頭位は東方と推定される。

遺物は検出されなかった。

SK 51（遺構：第22図）

墓壙の平面形は隅円長方形を呈し、断面は整った2段堀となっている。丘陵尾根の南側の標高約25.4mに位置する。主軸方位は等高線に対してほぼ並行し、磁北に対する角度はN37°Wを指す。規模は、1段目の長軸1.28m・短軸0.74m・現存する深さ0.27m・2段目の長軸0.90m・短軸西端0.39m・東端0.32m・深さ0.15mを測る。

遺物は検出されなかった。

SK 52（遺構：第22図）

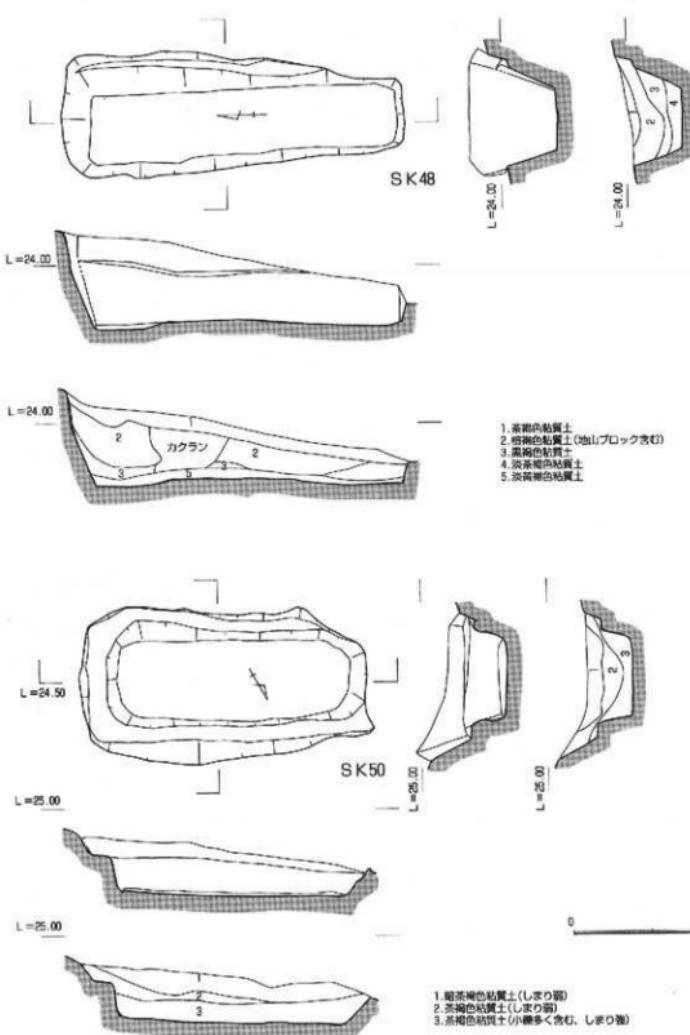
墓壙の平面形は隅円長方形を呈し、南端を除いて断面は2段堀となっている。丘陵尾根の南側の標高約25.1mに位置する。主軸方位は等高線に対してほぼ平行し、磁北に対する角度はN2°Eを指す。規模は、1段目の長軸2.32m・短軸0.61m・現存する深さ0.62m、2段目の長軸1.74m・短軸北端0.41m・南端0.32m・深さ0.17mを測る。墓壙断面図から裏込め土と推定される土層が観察されることから木棺墓と考えられる。

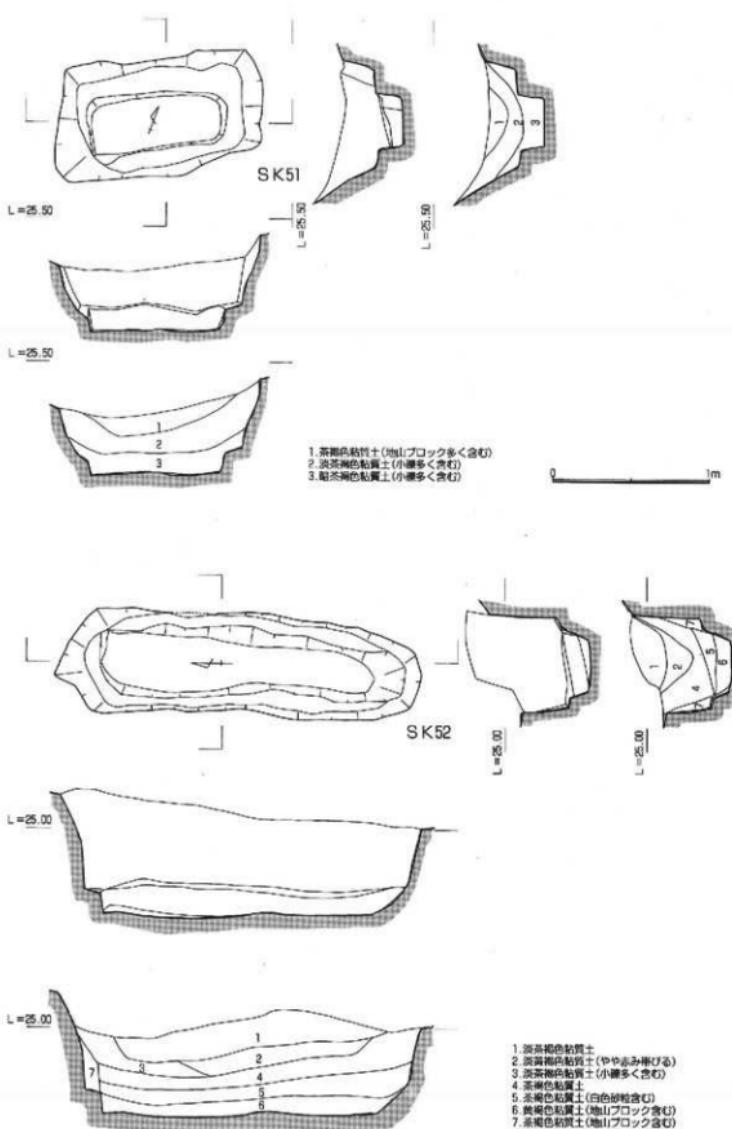
遺物は検出されなかった。

SK 53（遺構：第23図、遺物：第31図11）

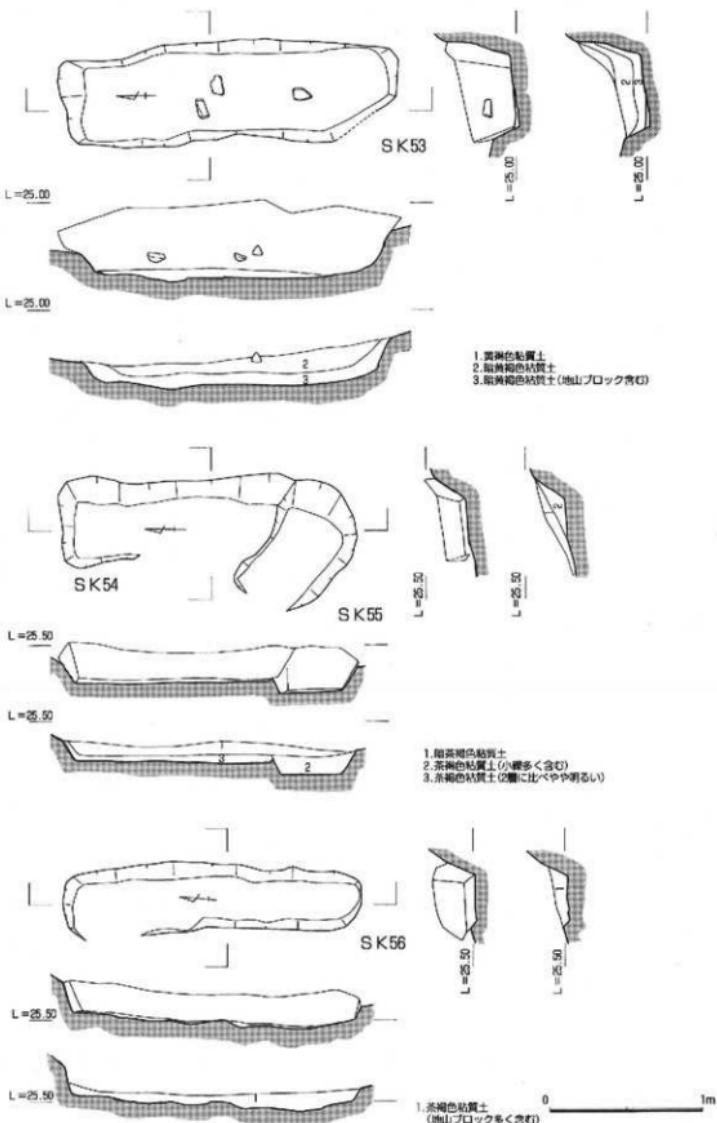
墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の上塚で、丘陵尾根のやや南側の標高約25.0mに位置する。主軸方位は等高線に対して平行し、磁北に対する角度はN0°を指す。規模は、長軸2.20m・短軸0.64m・現存する深さ0.48mを測る。墓壙底から若干浮いた状態で角礫を3個検出している。

遺物は墓壙上から発見（第31図11）が出土しており、SK 53に伴う可能性がある。

第21図 SK48・50実測図 ($S=1/30$)



第22図 SK51・52実測図 ($S=1/30$)



第23図 SK53・54・55・56実測図 (S=1/30)

SK 54 (遺構: 第23図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈すると考えられる素掘の土壙で、丘陵尾根の南側の標高約25.5mに位置する。主軸方位は等高線に対して平行し、磁北に対する角度はN1°Wを指す。墓壙の西壁の大部分や南壁は失われているが現状の規模は、長軸1.52m・短軸0.58m・現存する深さ0.26mを測る。墓壙の南側がSK 55と交わっているが、その切合関係はSK 54→SK 55である。

遺物は検出されなかった。

SK 55 (遺構: 第23図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の南側の標高約25.5mに位置する。主軸方位は等高線に対してやや直交し、磁北に対する角度はN57°Wを指す。規模は、長軸0.88m・短軸0.53m・現存する深さ0.28mを測る。墓壙の北壁はSK 54と交わっているが、その切合関係はSK 54→SK 55である。

遺物は検出されなかった。

SK 56 (遺構: 第23図)

墓壙の平面形はやや細長い隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の南側の標高約25.7mを測る。主軸方位は等高線に対してほぼ平行し、磁北に対する角度はN6°Wを指す。規模は、長軸1.94m・短軸0.42m・現存する深さ0.21mを測る。

遺物は検出されなかった。

SK 57 (遺構: 第24図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の北側の標高約24.6mに位置する。主軸方位は等高線に対してやや並行し、磁北に対する角度はN83°Wを指す。規模は、長軸1.46m・短軸0.55m・現存する深さ0.42mを測る。

遺物は検出されなかった。

SK 58 (遺構: 第24図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の北側の標高約25.0mに位置する。主軸方位は等高線に対してほぼ平行し、磁北に対する角度はN83°Wを指す。規模は、長軸1.14m・短軸東端0.58m・西端0.44m・現存する深さ0.64mを測る。東端幅が西端お比較してやや幅広となっていることから、被葬者の頭位は東方と推定される。墓壙底の端部に小口溝が認められることから、木棺墓の可能性が高い。

遺物は検出されなかった。

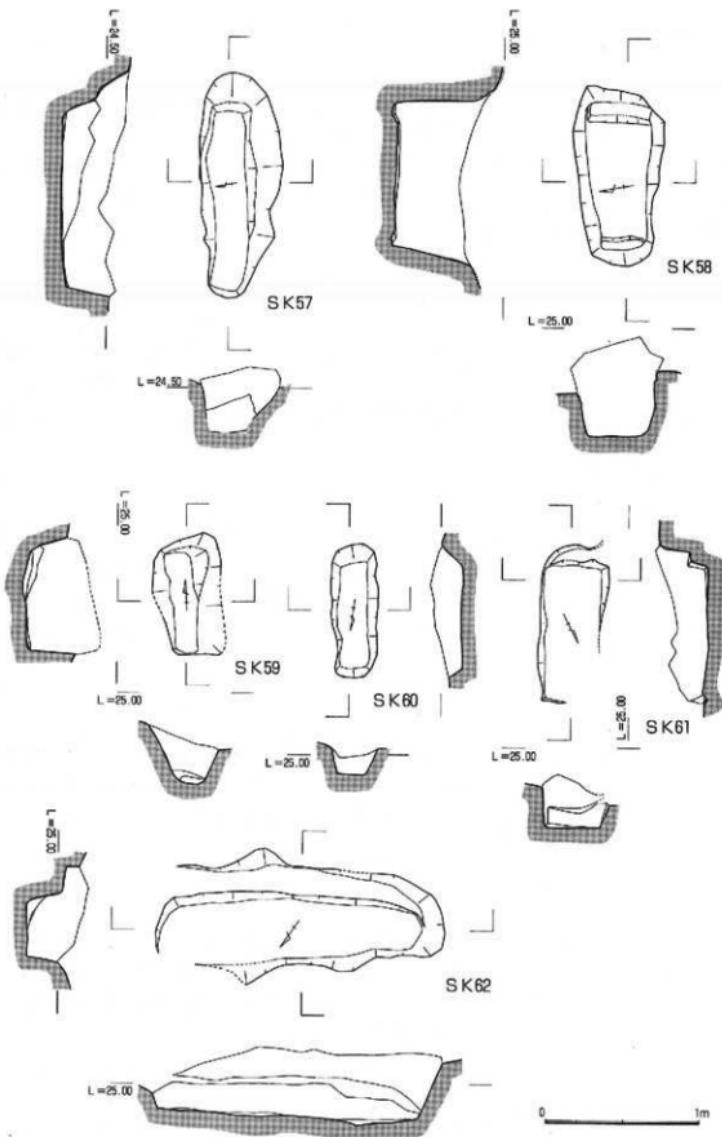
SK 59 (遺構: 第24図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の北側の標高約24.8mに位置する。主軸方位は等高線に対して直交し、磁北に対する角度はN3°Eを指す。規模は、長軸0.79m・短軸0.44m・現存する深さ0.47mを測る。

遺物は検出されなかった。

SK 60 (遺構: 第24図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の中央やや北側の標高約25.0mに位置する。主軸方位は等高線に対して直交し、磁北に対する角度はN8°Wを指す。規模は長軸0.87m・短軸0.29m・現存する深さ0.21mを測る。



第24図 SK57・58・59・60・61・62実測図 (S=1/30)

遺物は検出されなかった。

SK 6 1 (遺構: 第24図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈し、検出状況では墓壙南側のみ断面2段堀となっている。丘陵尾根の中央やや北側の標高約24.8mに位置する。主軸方位は等高線に対して平行し、磁北に対する角度はN25°Eを指す。墓壙西壁を中心にSD02によって削平されているが現状の規模は、長軸1段目1.02m・2段目0.93m・短軸0.44m・現存する深さ0.33mを測る。

遺物は検出されなかった。

SK 6 2 (遺構: 第24図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈し、検出状況では墓壙東側が断面やや不整形な2段堀となっている。丘陵尾根のはば中央の標高約25.1mに位置する。主軸方位は等高線に対してほぼ平行し、磁北に対する角度はN28°Eを指す。墓壙西壁を中心にSD02によって削平されているが現状の規模は1段目長軸1.89m・短軸0.63m・現存する深さ約0.15m・2段目短軸東端0.47m・西端0.37m・深さ0.20mを測る。東端幅が西端と比較してやや幅広くなっていることから、被葬者の頭位は東方と推定される。

遺物は検出されなかった。

SK 6 3 (遺構: 第25図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈し、整った断面2段堀の土壙である。丘陵尾根の中央やや南側の標高約24.9mに位置する。主軸方位は等高線に対してほぼ平行し、磁北に対する角度はN27°Eを指す。規模は、1段目長軸0.97m・短軸0.67m・現存する深さ0.40m、2段目長軸0.59m・短軸0.34m・深さ0.09mを測る。墓壙底の端を浅い溝が廻っているのが確認されることから、木棺墓の可能性が高い。

遺物は検出されなかった。

SK 6 4 (遺構: 第25図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈し、墓壙西部のみ段が設けられている。丘陵尾根の北側の標高約26.1mに位置し、磁北に対する角度はN38°Eを指す。規模は長軸1.96m・短軸北端0.84m・南端0.67m・現存する深さ0.48mを測る。北端幅が南端と比較してやや幅広いことから、被葬者の頭位は北方と推定される。

遺物は検出されなかった。

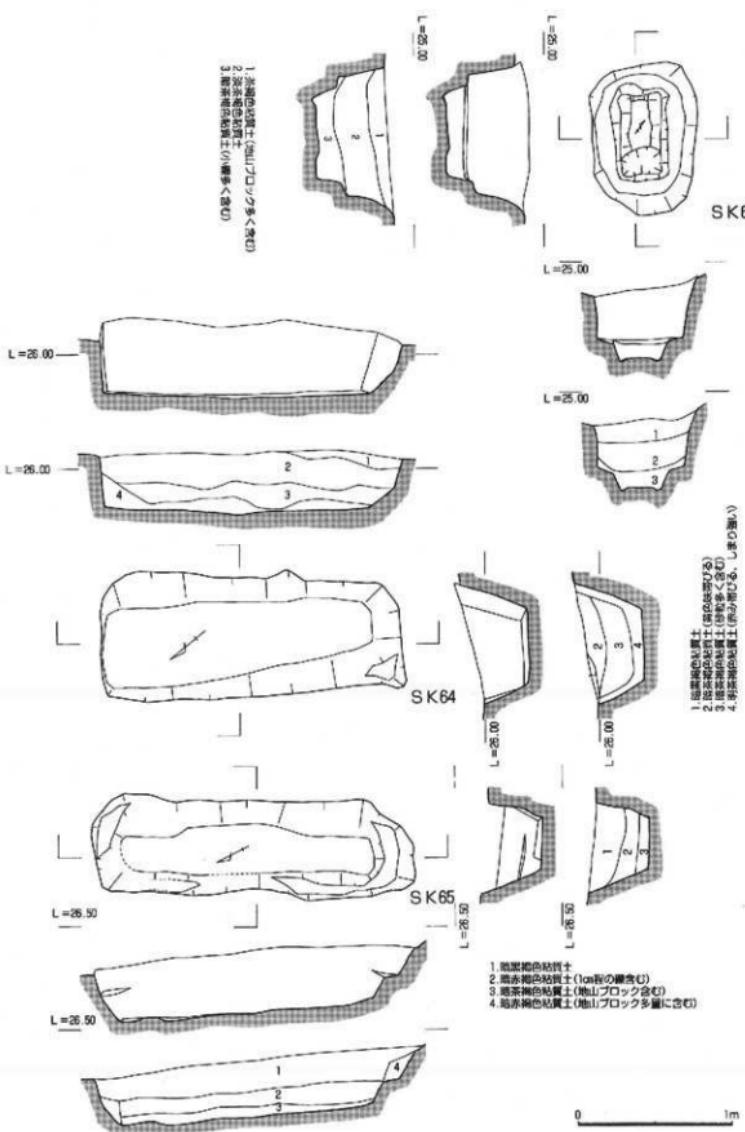
SK 6 5 (遺構: 第25図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈し、やや不整形な断面2段堀となっている。丘陵尾根の北側の標高約26.4mに位置する。規模は、1段目長軸2.06m・短軸0.64m・現存する深さ0.21m、2段目長軸1.76m・短軸0.55m・深さ0.20mを測る。墓壙断面図から裏込め土と推定される土層が観察されることから木棺墓と考えられる。

遺物は検出されなかった。

SK 6 6 (遺構: 第26図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の北側の標高約26.3mに位置する。主軸方位は等高線に対して平行し、磁北に対する角度はN11°Wを指す。規模は、長軸2.28m・短軸西端0.71m・東端0.56m・現存する深さ0.16mを測る。西端幅が東端と比較してやや



第25図 SK63・64・65実測図 (S=1/30)

幅広となっていることから、被葬者の頭位は西方と推定される。墓壙底はほぼ水平となっており、西側で朱が確認された。墓壙断面図から裏込め土と推定される土層が観察されることから木棺墓と考えられる。

遺物は検出されなかった。

SK 67 (遺構: 第26図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈し、墓壙の東・南壁が整った断面2段堀となっている。丘陵尾根のはば中央の標高約30.0mに位置する。主軸方位は等高線に対して平行し、磁北に対する角度はN80°Eを指す。規模は、1段目長軸2.24m・短軸西端0.85m・東端0.74m・現存する深さ0.26m、2段目長軸2.08m・短軸西端0.71m・東端0.59m・深さ0.21mを測る。西端幅が東端と比較してやや幅広となっていることから、被葬者の頭位は西方と推定される。墓壙底はほぼ水平となっている。

遺物は検出されなかった。

SK 68 (遺構: 第26図)

墓壙の平面形は隅円長方形を呈する素掘の土壙で、丘陵尾根の東寄りの標高約30.8mに位置する。主軸方位は等高線に対して直交し、磁北に対する角度はN15°Wを指す。規模は、長軸2.04m・短軸0.66m・現存する深さ0.31mを測る。墓壙底はほぼ水平となっている。墓壙断面図から裏込め土と推定される土層が観察されることから木棺墓と考えられる。

遺物は検出されなかった。

SD 01 (遺構: 第27図 遺物: 第32図5・6)

前回の報告でイ溝状遺構としていたもので、丘陵尾根の中央から北側の標高約19.9mに位置する。主軸方位は尾根の走向に対して直交し、磁北に対する角度はN82°Wを指す。規模は、長辺約3.30m・短辺約0.60m・深さ約0.10mを測る。

遺物は南側で溝底部からやや浮いた状態で鼓形器台、北側で溝底部に接して低脚壺が出土している。第32図5は鼓形器台で、器高9.2cm、器受部径16.6cm、脚台部径15.4cmを測る。受部・脚台部ともゆるやかに外反し、端部を拡張する。調整は内面受部は横方向のヘラケズリ後ヘラミガキ、内面脚部は横方向のヘラケズリを施す。6は低脚壺で、脚部径9.0cmを測る。壺部はゆるやかに外反し、内外面ともヘラミガキを施す。

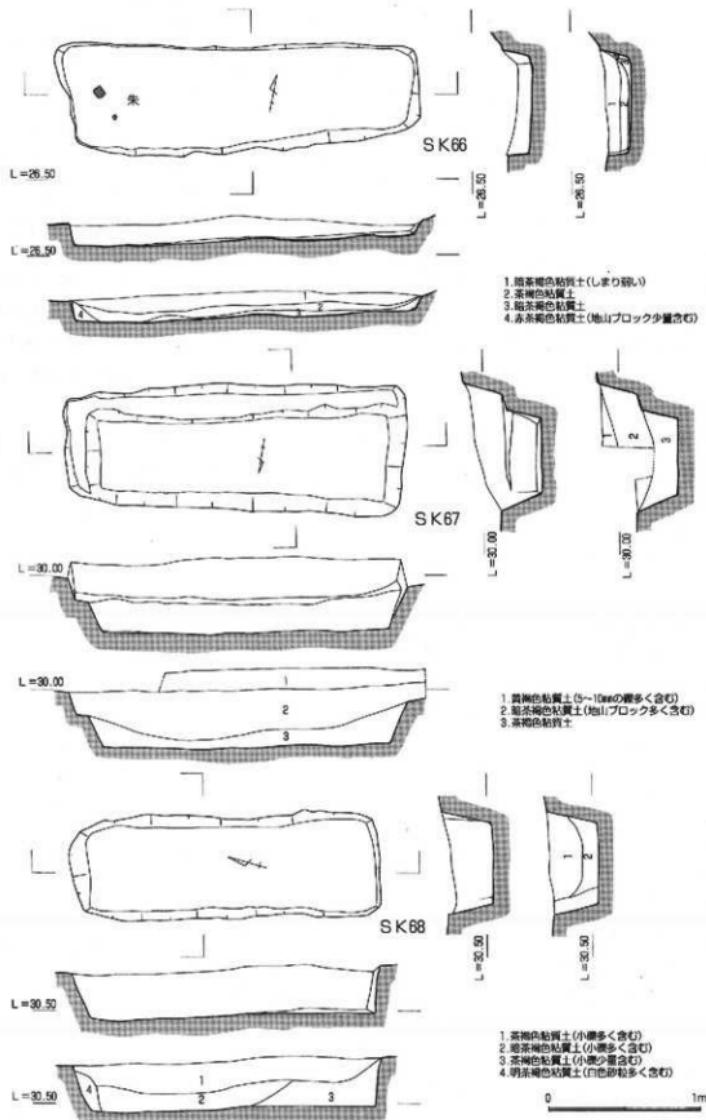
SD 03 (遺構: 第28図)

試掘調査時に検出された溝状遺構である。丘陵尾根の中央の標高約29.8mに位置する。主軸方位は尾根の走向に対して直交し、磁北に対する角度はN89°Wを指す。規模は長軸約4.40m・短軸約0.90m・深さ0.20mを測る。

遺物は検出されなかった。

<遺構に伴わない遺物> (出土状況: 第29図、出土遺物: 第30・31図)

弥生土器が調査区のはば中央の標高約21.5~27.0mの範囲で出土し、そのうち陶化可能なものについて第31図に示し、その出土状況を第29図に示した。第31図1~4は吉備系遺物と考えられる。1はSK35の約2m北東で検出した壺で、口径19.6cmを測る。短く立ち上がる口縁部の外面に平行沈線を5条施し、外面及び口縁部内面に赤色顔料が塗布されているのが確認される。内面はヨコナダアが施されている。色調は暗橙褐色を呈する。2はSK35の墓壙上で検出した壺の口



第26図 SK66・67・68実測図 (S=1/30)

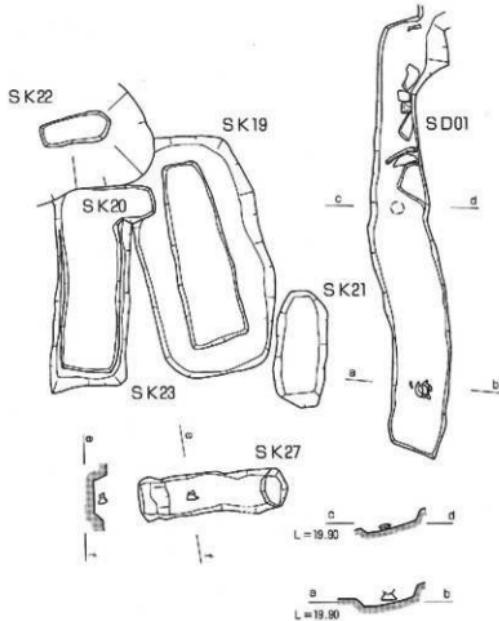
縁部で、口径 1.8.2 cm を測る。短く立ち上がる口縁部の外面に平行沈線を 7 条施している。赤色顔料の塗布は認められない。調整は風化が著しく不明である。色調は明橙褐色を呈する。3 は SK 3 5 の墓壙上で検出した壺の頸部で平行沈線を施しており、外面に赤色顔料の塗布が認められる。内面は横方向のヘラケズリを施す。内面は横方向のナデもしくはヘラミガキを施していると思われるが、風化が著しく判然としない。色調は明橙褐色を呈する。4 は SK 3 4 の約 1 m 南で検出した壺の口縁部で、口径 1.4.0 cm を測る。短く立ち上がる口縁部に平行沈線を施す。内外面とも赤色顔料の塗布が認められる。色調は橙褐色を呈する。5 は SK 3 4 の約 1 m 南東で検出された壺で、口縁部の大部分を欠損している。口縁部と頸部には平行沈線を施し、肩部に貝殻原体による列点文を施す。内面全体部はヘラケズリを施す。複合口縁部の後が発達しており、口縁部は内傾する。色調は淡褐色を呈し、外面には赤色顔料の塗布が認められる。6 は SK 3 4 の墓壙上面から検出された壺口縁部で、口縁部の大部分を欠損している。口縁部外面に擬凹線文を施しているのが確認される。調整は風化が著しく不明である。色調は淡黄褐色を呈する。7 は SK 5 9 の約 1 m 北東で検出された壺で、口縁端部を欠損している。口縁外面に擬凹線文が施されている。内面は頸部以下ヘラケズリを施す。色調は橙褐色を呈する。8 は SK 4 6 の墓壙上で検出された壺口縁部で、口径 1.6.4 cm を測る。口縁端部を外方に折り曲げて平坦面をつくる。

色調は橙褐色を呈する。9 は SK 3 3 の墓壙上から検出した壺で、口径 2.0.4 cm を測る。比較的高い口縁部を持ち、端部を軽く外方へ折り曲げ丸く收めている。内面頸部に指頭圧痕が認められ、頸部以下ヘラケズリを施す。

色調は淡橙褐色を呈する。

草田編年 4 期に位置づけられる。10 は SK 5 9 のやや東方で検出された壺で、ほぼ全形を復元でき口径 1.7.4 cm を測る。複合口縁部の後は水平方向に突出するが、鋭さを失っている。外面肩部に 2 条の浅い平行沈線を施す。内面は頸部以下ヘラケズリを施し、底部付近に指頭圧痕が認められる。色調は淡橙褐色を呈する。

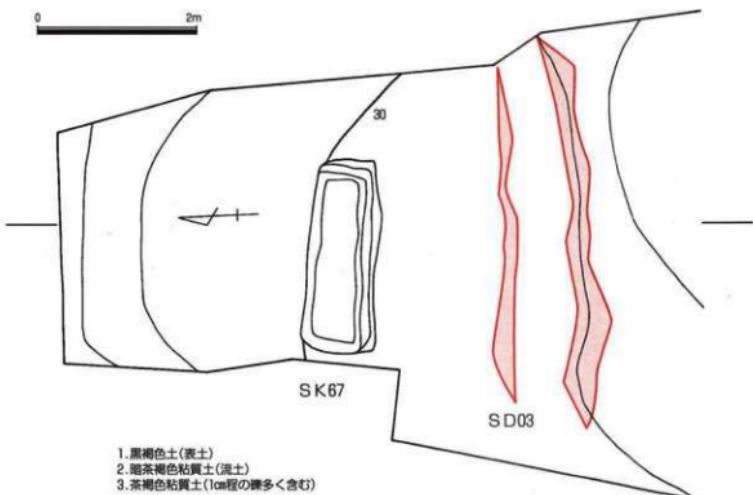
11 は SK 5 3 の墓壙上で検出された壺の口縁部もしくは高環脚部で、やや器壁が厚く端部が欠損している。調整は風化が著しく不明である。色調



第27図 SD01(区画図1)実測図
(S=1/60、「長曾土壙墓群」1981よりトレース、一部改変)

は橙褐色を呈する。12はSK64の北西1mで検出された壺の口縁部で、端部が欠損している。器壁は薄く引き出したような口縁を持ち、複合口縁部の稜はあまり突出しない。調整は風化が著しく不明である。色調は黄褐色を呈する。草田編年5期に位置づけられる。13はSD02によって擾乱を受けた場所から出土した壺の口縁部で、口径12.8cmを測る。外方に開きまっすぐ延びたやや短い口縁部を持ち、端部は丸く收めている。口縁部内面はヨコナデを施す。色調は淡褐色を呈する。

14はSX02の北東約1mで検出された壺もしくは壺の底部で、据えられた状態で出土した。器壁はやや厚く丸底で、底が欠損しているがこれは焼成後穿孔した可能性がある。内面はヘラケズリを施す。色調は明橙褐色を呈する。15はSK33の墓壙上から出土した壺もしくは壺の底部で、底部は不安定な平底となっている。外面は細かい縱方向のハケ目を施す。内面の調整は風化が著しく不明である。色調は黄褐色を呈する。16はSK58・59・61周辺から出土した鼓形器台の脚部である。端部を肥厚させ丸く收めている。色調は橙褐色を呈する。17はSK32の東約1mで検出した鼓形器台である。器壁が厚く稚拙なつくりである。調整は風化が著しく不明である。色調は淡橙褐色を呈する。

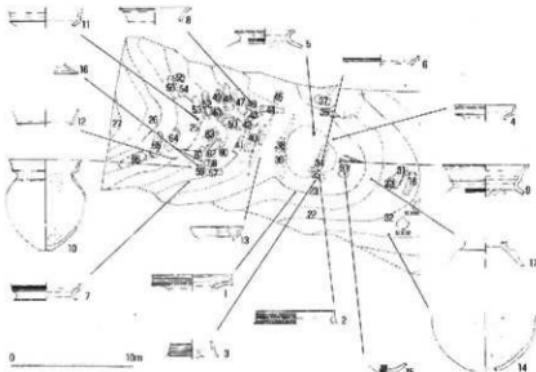


第28図 SD03(区画墓2)実測図 (S=1/60)

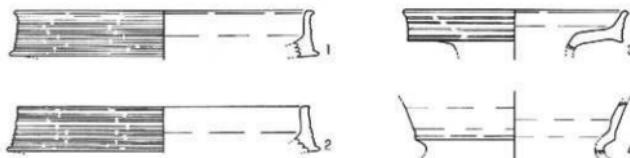
<表探遺物>（第30図）

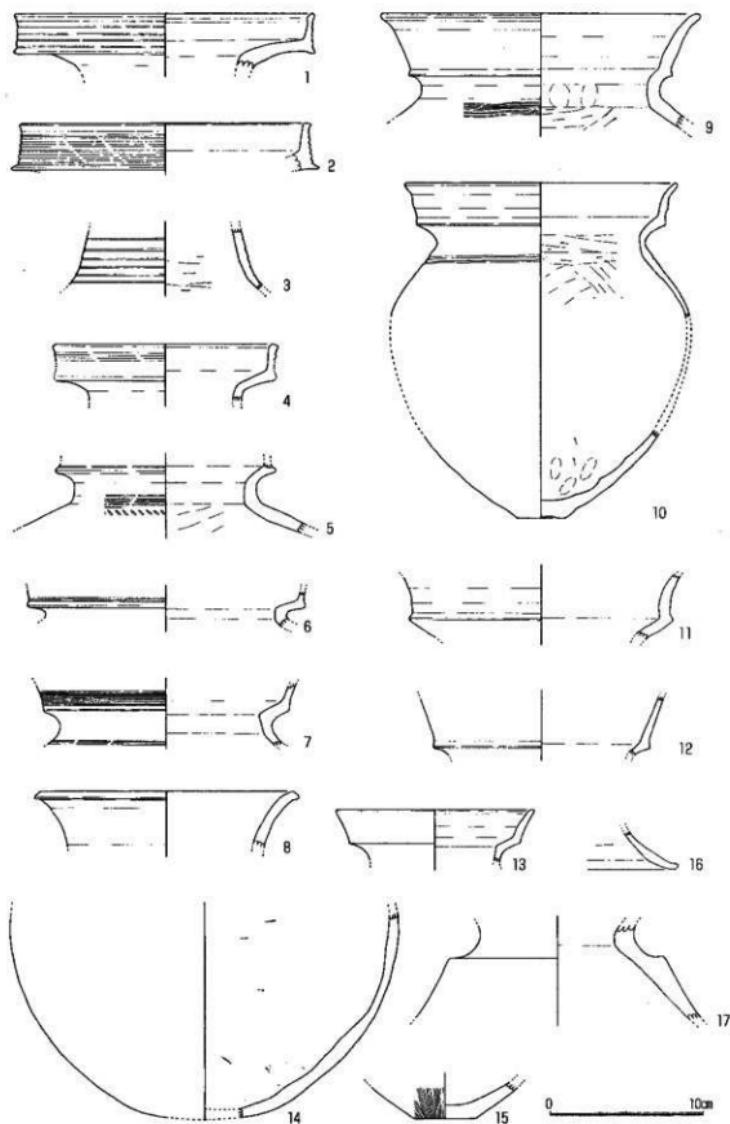
事業開始前の立木伐採する際重機が丘陵上に登っており、調査区の数カ所にその伐採した雑木を燃やすための穴が數ヵ所掘られていた。その重機の通り道は表土が若干削れており、SK34・SK35付近から弥生土器を数点表探した。その中で図示できるものを第32図に示した。

1～3は壺でいずれも吉備系遺物と考えられる。1、2については器台になる可能性も考えられる。1は口径19.6cmを測る発達した複合口縁をもち、口縁外面に櫛状工具で7条の平行沈線を施す。口縁端部を外方に軽く折り曲げ、複合口縁部の稜は水平方向に突出する。内面の調整は風化が著しく不明である。色調は橙褐色を呈する。2も1と同様な壺口縁部で口径19.4cmを測る発達した口縁部をもつ。口縁外面には櫛状工具で7条の平行沈線を施し、複合口縁部の稜は水平方向に突出する。内面の調整は風化が著しく不明である。色調は橙褐色を呈する。3はやや短く立ち上がる口縁部の外面に4条の平行沈線を施す。口縁端部を外方に軽く折り曲げ、複合口縁部の稜はやや下方に突出する。外面の一部に赤色顔料を塗布しているのが確認される。内面の調整は風化が著しく不明である。色調は褐色を呈する。4は壺の口縁部で端部が欠損している。複合口縁部の稜の突出度は弱い。内面の調整は風化が著しく不明である。色調は淡黄褐色を呈する。

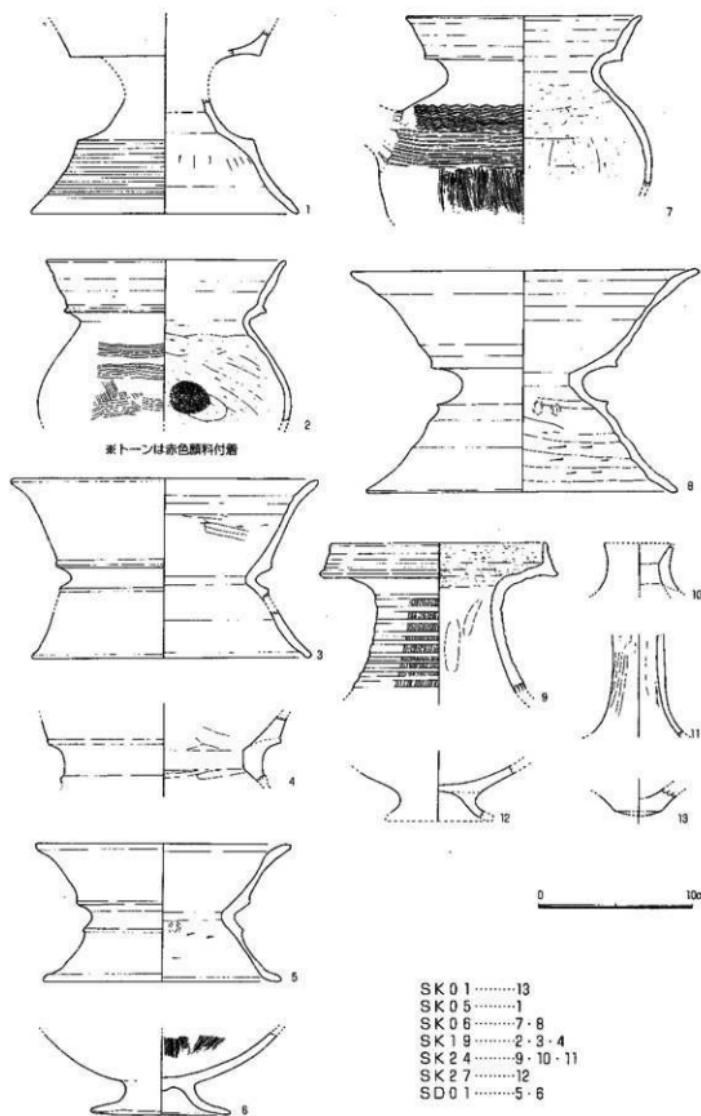


第29図 長曾土壤墓群遺物出土状況図 (S=1/30、遺物は1/1/6)

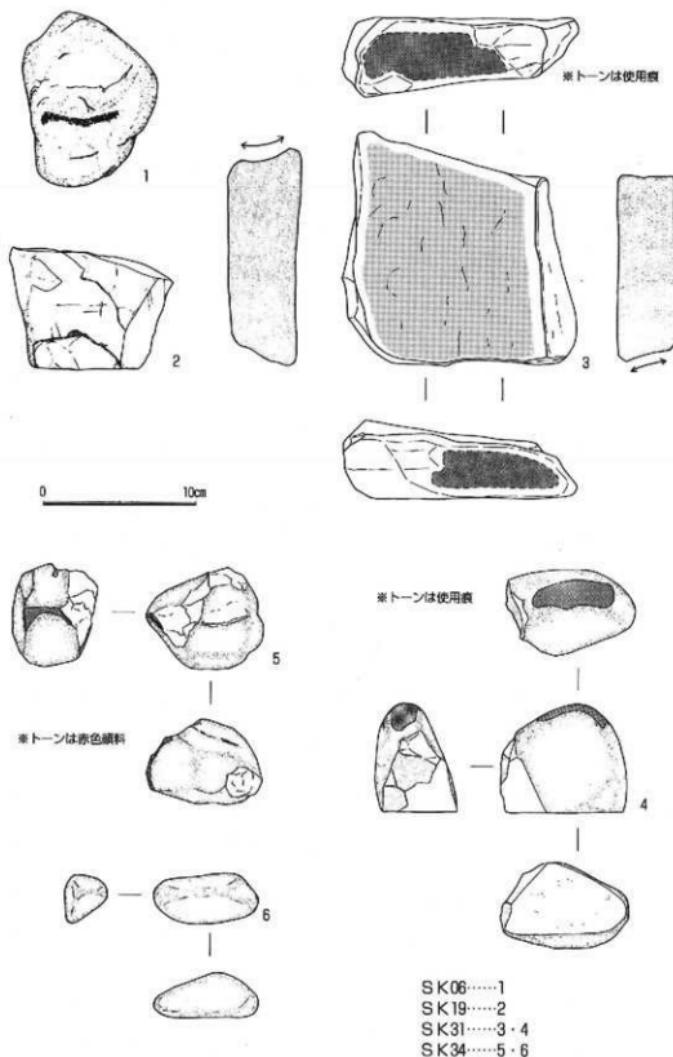
第30図 長曾土壤墓群調査前表探遺物実測図
(S=1/3、SK34・35付近)



第31図 長曾土壤墓群出土遺物実測図 (S=1/3)



第32図 長曾土壤墓群 1981年調査時出土遺物実測図
(S=1/3、「長曾土壤墓群」1981よりトレース)



第33図 長曾土壤墓群出土標石実測図
(S=1/3、1・2は「長曾土壤墓群」1981よりトレース)

長曾土壙墓群 土壙墓・木棺墓観察表

遺構名	墓壙の形態	墓壙・1段目(cm)			墓壙・2段目(cm)			墓壙底(cm)		半軸方位 (磁北に対して)	墓壙底 (m)	出土遺物・ 備考
		長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ	長さ	幅			
SK01	素掘	75	56	28				61	56	N68° W	20.73	高壙・墓壙側壁に朱
SK02	素掘	90	34	52				86	36	N79° W	19.85	
SK03	2段掘	213	50 ~70	16	192	43	23	185	25 ~37	N78° W	20.75	
SK04	素掘	173	50 ~90	45				175		N42° E	20.45~ 20.60	
SK05	2段掘	234	60 ~94	55				225	53 ~83	N77° W	19.90	鼓形器台
SK06	素掘	220	47 ~60	40				205	40 ~52	N15° E	19.80	標石・汁口 上器・鼓形 器台
SK07	素掘	100	46	40				75	25	N82° E	22.25	木棺墓
SK08	素掘	124	50 ~60	55				100	35	N16° E	22.10	
SK09	2段掘	73	36	46				55	22	N9.5° E	20.90	
SK10	2段掘	80	22 ~25	25				77	17	N66° W	20.90	
SK11	素掘	128	40 ~50	28				105	40	N69° W	20.30	
SK12	素掘	160	45 ~60	60				218		N69° W	19.95	木棺墓
SK13	2段掘	125	74	60	85	28	20	77	20	N67.5° W	19.25	木棺墓
SK14	素掘	100	70	30				85	40	N77° E	20.60	
SK15	素掘	205	70	20	195	50 ~70	45	185	35 ~60	N68° W	20.60	
SK16	素掘	193	43 ~55	17	184	44 ~50	30	185	30 ~44	N36° E	21.75	
SK17	素掘	100	55	40					33	N90° W	20.95	
SK18	素掘	62	40	54				55	40	N80° E	20.90	
SK19	2段掘	250	140	32	180	40 ~55	38	183	32 ~55	N3° W	18.90~ 19.05	標石・甕・ 鼓形器台2、 木棺墓
SK20	素掘	80	45	45				93	30	N85° W	20.10	
SK21	素掘	115	50	30				100	36	N15° E	20.40	
SK22	素掘	60	33	7				67	23	N90° W	20.05	
SK23	2段掘	170 以上	79	22	155 以上	59	37	155 以上	35 ~53	N11° E	20.10	墓壙底に朱

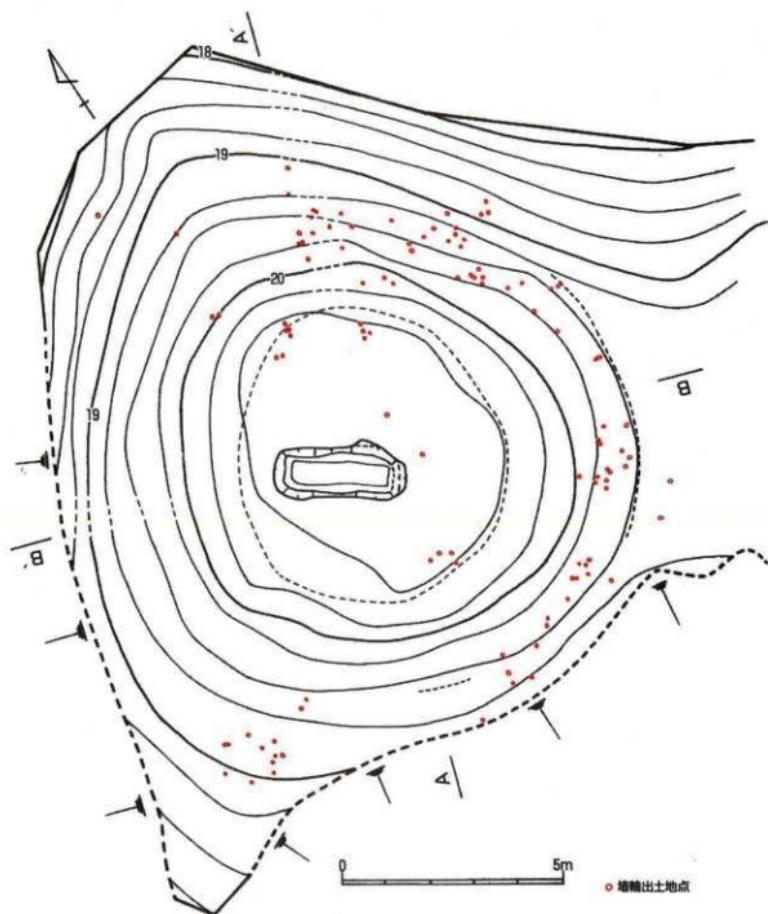
遺構名	墓壙の形態	墓壙・1段目(cm)			墓壙・2段目(cm)			墓壙底(cm)		主軸方位 (磁北に対して)	墓壙底	出土遺物・ 備考
		長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ	長さ	幅			
SK24	2段掘	235	60 ~80	33	195	42 ~57	32	186	43	N13.5° E	17.90	吉備系壺・ 手捏土器・ 高坏
SK25	素掘	170 以上	40 ~60	40				150 以上	46	N87° W	18.00	
SK26	2段掘	240	40 ~60	45				192	32 ~55	N5° W	18.05	
SK27	素掘	151	40	10				142	34	N80° W	20.20	低脚环、木 棺蓋
SK28	素掘	113	65	16				80	35	N66° W	20.25	
SK29	素掘	80	50	70				67	31	N74° W	18.57	
SK30	2段掘	176	65 以上	20	110	46 ~56	36	98	34 ~51	N88° E	18.85	
SK31	2段掘	193	64	10	185	37 ~55	25	175	30 ~37	N30° E	21.85	
SK32	素掘	110	51	30				87	40	N30° E	22.03	
SK33	素掘	177	84	80				174	66	N21° E	22.45	
SK34	素掘	205	53 ~62	47				176	33 ~54	N30° E	23.07	標石
SK35	素掘	150	67	46				123	32	N34° W	22.05	
SK36	2段掘	56 以上	85	31	32 以上	49 以上	26	24 以上	37	N63° E	21.30	
SK37	素掘	138 以上	60	32				130 以上	51	N65° W	22.40	木棺墓
SK38		234 以上	86 以上	26 以上				210	80	N24° E	23.85	木棺墓
SK39		70 以上	84 以上	29 以上				53 以上	68	N84° W	23.35	
SK40	素掘	226	70	50				203	54	N57° E	24.05	
SK41	素掘	147	55	28				143	41	N32° E	24.60	
SK42	素掘	110	44	48				90	23	N33° E	24.05	
SK43	素掘	131	38	20				120	27	N11° E	24.20	
SK44	一部 2段掘	195	39 ~53	23	174		31	164	26 ~48	N17° W	23.75	
SK45	素掘	113	53	45				102	35	N27° E	22.82	
SK46	素掘	123 以上	74	43				127 以上	55	N18° E	24.03	
SK47	素掘	215	67 ~76	66				185	44 ~62	N3° W	24.00	

遺構名	墓壙の形態	墓壙・1段目(cm)			墓壙・2段目(cm)			墓壙底(cm)		主軸方位 (磁北に対して)	墓壙底	出土遺物・ 備考
		長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ	長さ	幅			
SK48	2段掘	216	45 ~75	18		70	27	195	36 ~45	N2° W	23.65	
SK49	一部 2段掘	108	44	12	82		22	73	24	N9° E	23.75	
SK50	2段掘	181 以上	96	31	165	58 ~68	22	148	50	N29° W	24.45	
SK51	2段掘	128	74	27	90	32 ~39	15	83	32	N37° W	24.80	
SK52	2段掘	232	61	62	174	32 ~41	17	173	19 ~36	N2° E	24.48	木棺墓
SK53	素掘	220	64	48				198	33 ~56	N0°	24.51	
SK54	素掘	152 以上	58	26				131 以上	35	N1° W	25.25	
SK55	素掘	88	53	28				70	40	N57° W	25.20	
SK56	素掘	194	42	21				185	27	N6° W	25.45~ 25.50	
SK57	素掘	146	55	42				117	24	N83° W	24.20	
SK58	素掘	114	44 ~58	64				95	30 ~43	N83° W	24.30	木棺墓
SK59	素掘	79	44	47				65	18	N3° E	24.41	
SK60	素掘	87	29	21				69	20	N8° W	24.87	
SK61	一部 2段掘	102			93	44	33	88	37	N25° E	24.49	
SK62	2段掘	189	63	15		37 ~42	20	176	24 ~41	N28° E	24.78	
SK63	2段掘	97	67	40	59	34	9	48	26	N27° E	24.38	木棺墓
SK64	一部 2段掘	196	67 ~84	48				176	29 ~53	N38° E	25.78	
SK65	一部 2段掘	206	64	21	176	55	20	165	23 ~33	N27° E	25.90~ 26.05	木棺墓
SK66	素掘	228	56 ~71	16				228	50 ~66	N11° W	26.18	墓壙底に朱、 木棺墓
SK67	2段掘	224	74 ~85	26	208	59 ~71	21	188	45 ~56	N80° E	29.64	
SK68	素掘	204	66	31				188	54 ~61	N15° W	30.45	木棺墓

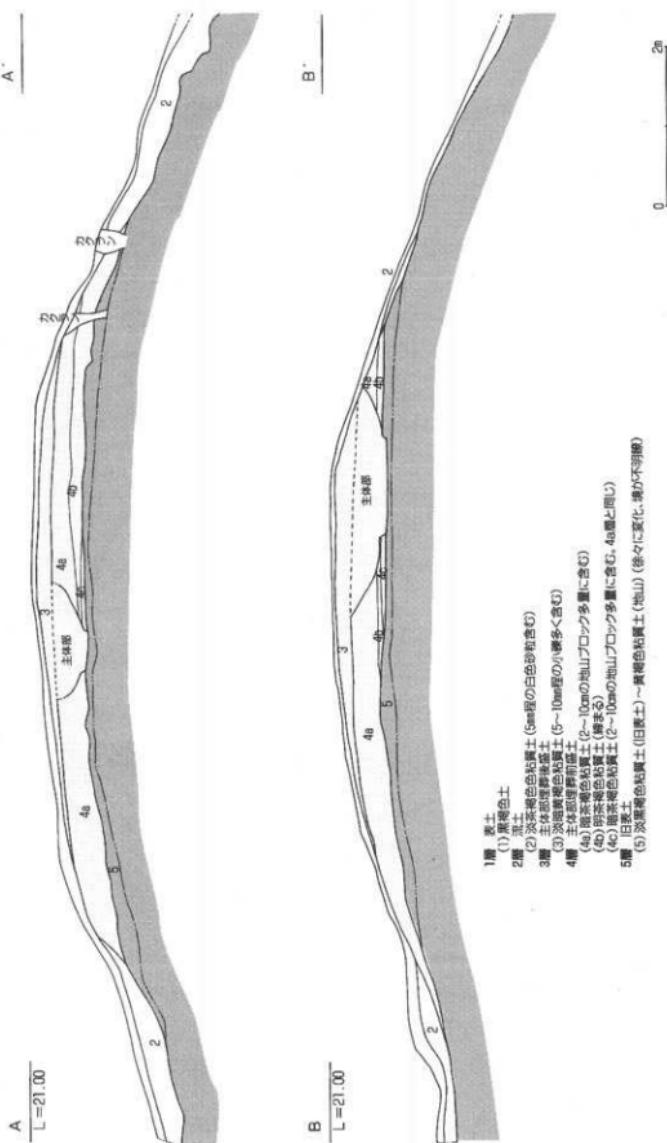
第2節 刃畠1号墳

<調査前状況>（第8図）

刃畠1号墳は標高約20mの丘陵先端部に所在し、現状では採土により墳丘の東側と北側は大きく削られ急な崖面となっている。調査前測量によればやや不整形ながら径約12mほどの円墳と観察さ



第34図 刃畠1号墳測量図・埴輪出土状況図 ($S = 1/100$)



第35図 別畠1号墳土層図 (S=1/60)

れた。また、調査前には刃畠1号墳の東側約30mの尾根基軸側の高まりを、一辺約8mの方墳「刃畠2号墳」として認識していた。

＜調査の概要＞

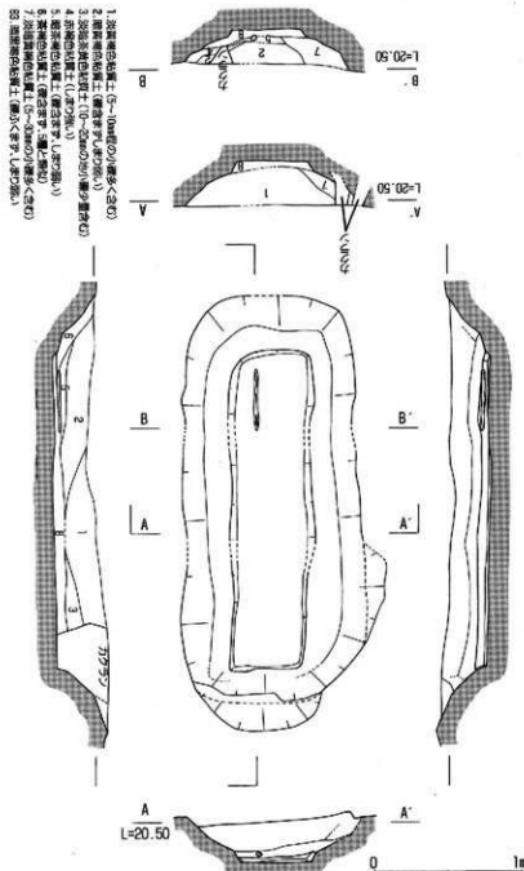
当初は古墳2基と想定して調査を進めていたが、「刃畠2号墳」は奈良時代の溝状造構SD02によって尾根基軸側が切られていたことや不明確ながら西側を「コ」の字状に弥生時代後期に若干削り出しているようであるため、古墳のように観察されたことが判明した。刃畠1号墳は長曾土壙群と併行して調査を実施した。その結果、墳頂部のほぼ中央から埋葬施設1基が検出され、中から鉄刀等が出土した。また墳頂から墳裾にかけて円筒埴輪片が検出された。

＜墳丘＞（調査後：第34図）

図、盛土除去後：第8図、
墳丘断面：第35図

調査の結果、刃畠1号墳は円墳で墳丘は地形測量図から見ると、尾根基部の東側と南側では標高約19.50m付近にそれぞれ傾斜変換点があり、そこが墳丘端になると考えられる。北側と西側では明確な傾斜変換部は見られないのは、断面図から北側と西側の墳丘がかなり流失しているためと観察され、特に西側では墓壇の肩部までもが流失している様子が認められた。よって現状の規模は北側と西側の墳丘端を東側と南側同様標高約19.50m付近と仮定すると、南北約11m、東西約12mの円墳になるが、築造当時はこの規模より若干大きかったものと推定される。尾根基軸側を含めて周溝等は認められなかった。

墳丘は地山を一部整形し



第36図 刃畠1号墳 主体部実測図 (S = 1/30)

ているが、大部分が盛土で形成され、流水や地山の掘削土を用いている。盛土は現状で最大厚約0.6mを測る。墳丘の土層間から厚さ約4.0cm盛土を施した後、墓壙を掘削し、埋葬後に新たに厚さ約2.0cmの盛土を施しているように観察された。

この盛土をすべて除去したが、その下層からは東に隣接する長曾土壙墓群から続く埋葬施設は認められなかった。このことは、当初から剣畠1号墳が築造された場所に弥生時代後期の遺構が築かれなかったのか、もしくは剣畠1号墳築造時の地山整形によって同時代の遺構が失われたものと考えられる。

墳丘が流失している西側を除き、墳頂部から墳裾にかけて円筒埴輪片が散在していた。特に墳端付近の傾斜変換点付近で多く検出している。また出土した円筒埴輪のはほとんどが細片化していることなどを考慮すると、埴輪の樹立場所は墳丘頂部に据えられていた可能性が高い。

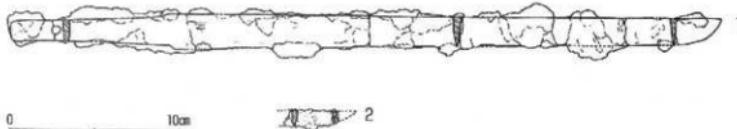
<埋葬施設>（第36図）

主体部は現状の墳丘のやや西側に位置し、地表から約2.6cmのところで墓壙が検出された。墓壙は平面プランが隅円長方形のもので2段壙を呈し、主軸方位は尾根筋にはほぼ平行し磁北に対する角度はN53°Wを指す。墓壙の東側は擾乱を受けている。墓壙の規模は上面で長さ2.78m・幅1.19m・深さ約0.20mを測る。木棺を据えたと想定される墓壙2段目の規模は上面で2.17m・西端幅0.57m・東端幅0.50m・深さ約0.08m、墓壙底で長さ2.12m・西端幅0.48m・東端幅0.46mを計測する。最初の盛土から掘り込まれた墓壙は約4.0cmで地山面に至り、若干ではあるが場所によって約6cm程地山面を掘り込んでいる。墓壙断面図から裏込め土と推定される土層が観察されることから埋葬主体は木棺と考えられる。被葬者の頭位は判然としないが、墓壙の西端幅が東端よりやや幅広いこと、棺内遺物が墓壙西端付近から出土していることなどから考慮すると頭位は西方である可能性が高い。

主体部内遺物として鉄製刀1・刀子1を検出した。鉄製刀は墓壙主軸方位に沿って墓壙2段目西端付近の南壁から約1.7cm離れて、墓壙底から約3cm程浮いた状態で検出した。その出土位置から棺内遺物と考えられる。刀子は墓壙東側の擾乱層から出土している。

<出土遺物の概要>（第37・38図）

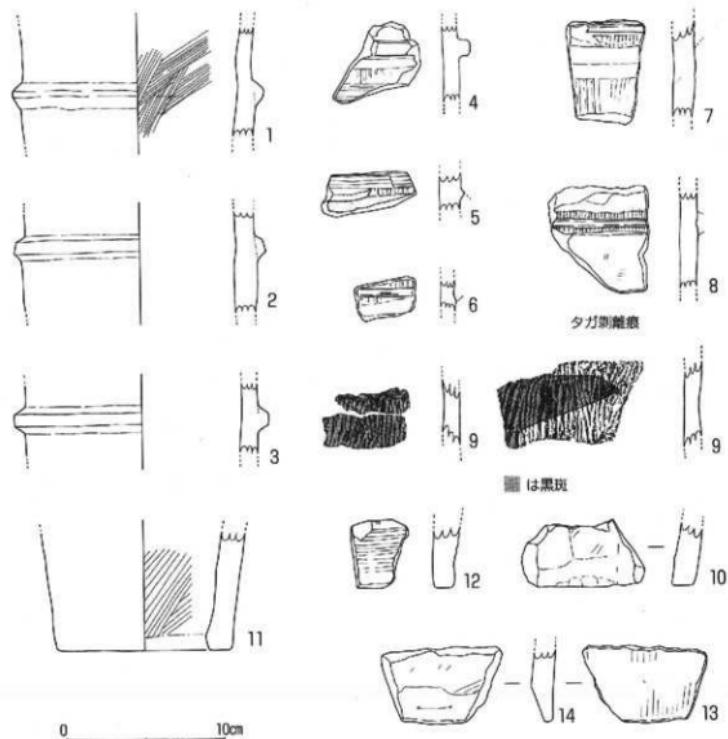
主体部出土遺物（第37図）：1は主体部から出土した鉄刀は、刀身はほぼ直線状を呈し、全長41.8cmを測る。刀身は長さ32.3cm、最大幅1.9cm、棟幅0.5cm、茎は長さ9.5cm、幅は鞘尻付近で1.1cmを測る。茎の先端は隅円方形を呈し、やや鞘尻によって目釘穴が1箇所見られる。刀身部にかすかに木質が付着しているのが観察できることから、木鞘を具して埋納されたことが知られる。2は刀子で主体部の東側の擾乱層から出土したもので、残存長3.3cmを測り、刃先と茎部を欠損している。



第37図 剣畠1号墳主体部出土遺物実測図 (S=1/3)

円筒埴輪（第38図） 円筒埴輪は埴丘斜面から墳壙にかけて、墳頂部から転落したと考えられる状況で検出された。出土した埴輪のほとんどが細片化しており、完全に復元できる個体を検出できなかったことから全体像については不明である。個々の埴輪の特徴は後述することとし、まずは円筒埴輪について総体的な特徴を列挙していきたい。なお、円筒埴輪の部分名称は『出雲岡田山古墳』（1987年、島根県教育委員会）で用いられたものに準拠する。

- a) 形態的特徴
 - ・全体形を復元できる個体は検出されてないが、タガ付近で約16cm前後と比較的小型のものと推定される。
- b) 調整の特徴
 - ・胴部もしくは口縁部に2次調整が用いられる個体と用いられない個体がある。
 - ・底部調整は施されない。底端部内面の埴輪自体の重みで広がった粘土を、横方向にケズリ落としている。
 - ・タガを付設する前に、工具で横方向に浅い沈線を横方向に引いてる。
- c) その他の特徴
 - ・黒班が確認できる個体がある。



第38図 刃畠1号墳出土円筒埴輪実測図 (S=1/3)

以上が剝畠1号墳出土埴輪の総体的な特徴である。以下、個々の埴輪の概要を報告する。

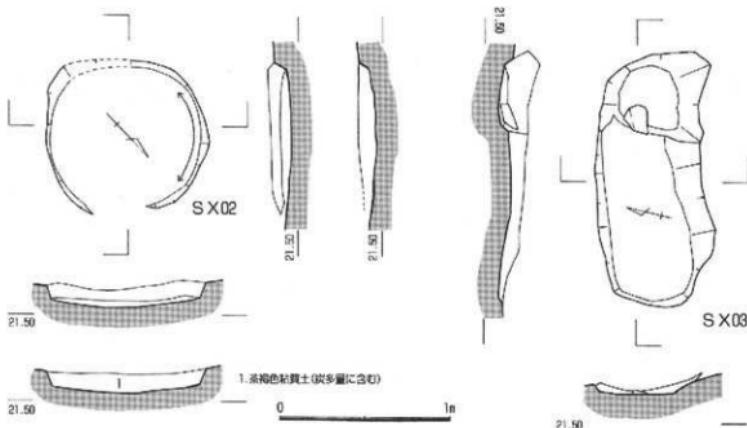
1～4は、タガ部の破片である。1はタガの角が丸くなってしまっており、2～4はやや扁平な台形を呈するタガである。4は外面に2次調整のヨコハケが確認される。タガ高はいずれも6～8mmである。5～8は、タガが剥離した個体である（トーンはタガ剥離部分を示す）。5は外面に2次調整のヨコハケの始点が確認される。6～8の外面に1次調整のタテハケを切って、剥離痕のはば中央にタガを付設する前に工具で浅い沈線を横方向に施しているのが観察される。その両端には、1次調整のタテハケが確認される。7はタガの下部に2段のヨコナデ・1次調整のタテハケが、5～8の内面にはタテハケ・ナメハケが確認される。9・10は外面に黒班が確認される個体である（トーンは黒班部分を示す）。9は全面に、10は一部に確認される。いずれも内面にはナメハケが施されている。1～14は基底部の破片でやや外反気味に立ち上がるものが多い。いずれも底部調整は施されず、底端部内面の埴輪自体の重みにより底部裾が広がり気味になった所を横方向に削っている。12の外面にはヨコハケが、14の外面にはタテハケが確認される。

第3節 その他の遺構

今回の調査で上述以外の遺構として性格不明土壙3基古墳時代と奈良時代の溝状遺構（第42・40図）を検出した。また丘陵尾根の北側を中心に遺構に伴わない須恵器が散在していた。以下、その遺構・遺物の概要を説明する。

SX01（第8図）

丘陵尾根からやや下がった斜面に掘られた土坑で長さ約3.2m・幅約2.4mを測る。丘陵側の南側の壁はほぼ垂直に立ち、横穴墓の墓道のような形態を呈している。この遺構の具体的な性格については不明である。



第39図 SX02・03実測図 (S=1/30)

遺物は検出されなかった。

S X 0 2 (第39図)

やや不整形な円形を呈する土抗で、北西辺の一部が失われている。丘陵尾根の北側の標高約21.6mに位置する。規模は径約90cm・深さ約13cmを測る。土抗の中には炭を多量に含む茶褐色粘質土が充填し、北東部分の壁が赤く焼けているのが確認された(図中の矢印で示した部分)。このことから焼土抗と考えられるが、その性格・時期等不明である。

遺物は検出されなかった。

S X 0 3 (第39図)

やや不整形な隅丸長方形を呈する土抗で、丘陵尾根の北側の標高約21.8mに位置する。主軸方位は等高線に対しほぼ平行し、磁北に対する角度はN77°Wを指す。規模は、長軸1.47m・短軸0.62m・深さ0.08mを測る。さらに土抗東側に0.56×0.48mの平面形が不整形な方形を呈する土抗が掘り窪められており、その中に長さ18cm・幅14cm・厚さ6cmの角礫が落ち込んでいた。この角礫には使用痕等人工的な加工は認められなかった。この土抗はその平面形から土壙墓の可能性がある。

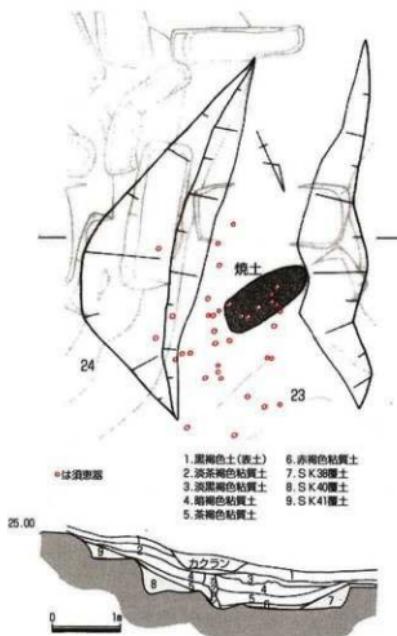
遺物は検出されなかった。

S D 0 2 (遺構:第40図、遺物:第41図)

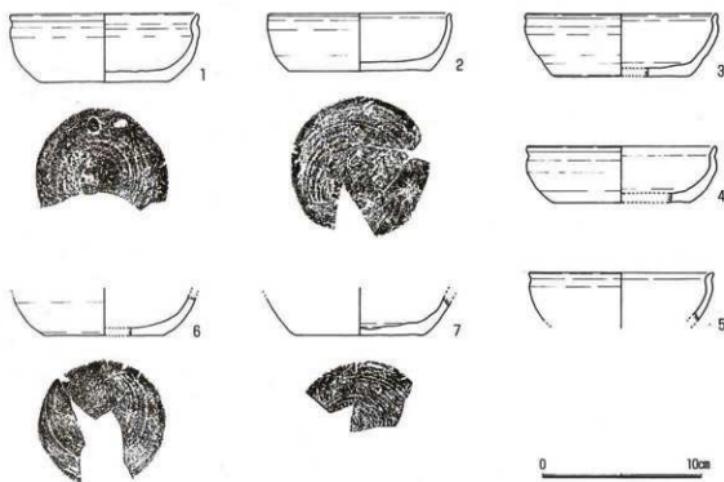
丘陵尾根の中央の北側の標高約23.0mに位置し、主軸方位は尾根の走向に対して直交する。この溝状遺構は、調査前は古墳の周溝と考えられていた遺構である。規模は、長さ約6.0m・最大幅約4.20m・深さ約1.1mを測る。この遺構を掘削する際、長曾土壤墓群のSK38・39・40・41の一部もしくは大部分を削平している。また溝底部や北側の西壁寄りの1.4×0.6mの梢円形を呈する範囲で焼土が確認された。

出土遺物はいずれも底部に回転糸切痕が確認される須恵器坏である。器高3.5~4.3cm・口径は11.3~11.9cm・底径7.4~8.8cmを測る。高台は付かず体部が内湾し丸みを帯び、口縁端部がわずかに外方に折れ曲がるタイプである。

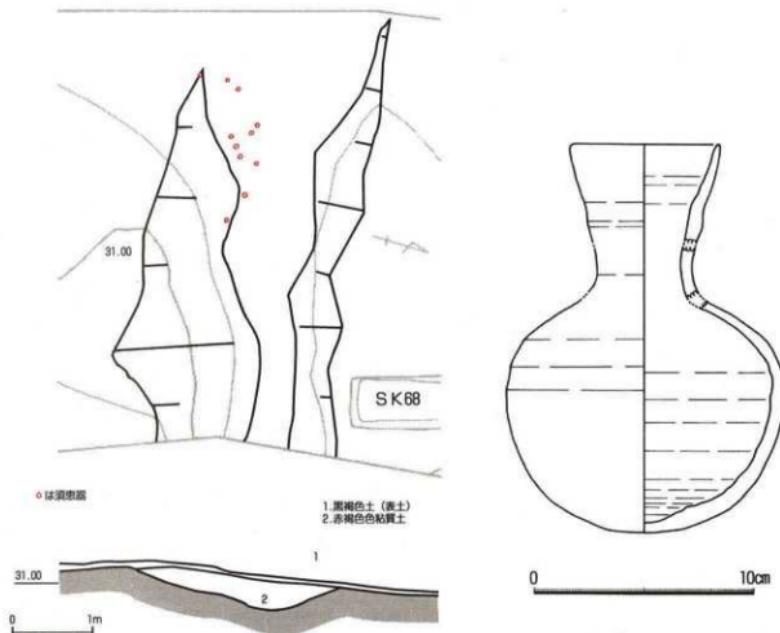
これら出土須恵器から、SD02の時期は高広編年IV A期(8世紀中葉~後半)と考えられるが、その具体的な性格につ



第40図 SD02実測図・遺物出土状況 (S=1/60)

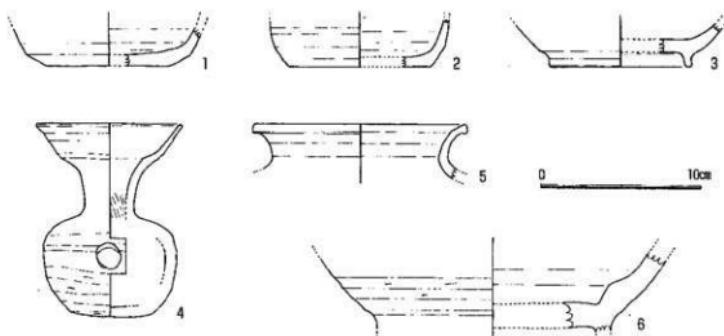


第41図 SD02出土遺物実測図 (S=1/3)



第42図 SD04実測図・遺物出土状況 (S=1/60)

第43図 SD04出土遺物実測図 (S=1/3)



第44図 遺構に伴わない遺物実測図(S=1/3)

いては不明である。

SD 04 (遺構: 第4 2図、遺物: 第4 3図)

丘陵尾根の中央の標高約31.0mに位置する。主軸方位は尾根の走向に対して直交する。この溝状遺構の東側は調査区外にのびている。規模は、長さ約5.5m以上・最大幅約2.7m・深さ約0.4mを測る。溝底部の西側に須恵器が散在していた。

出土遺物は須恵器直頸壺で、器高17.6cm・口径6.8cmを測る。高台は付かず、肩の張らない球形にちかい頸部をもつ。頸部外面中ほどを強くナデてアクセントを付けている。底部は丸く仕上げている。調整は内外面ともヨコナデのみ施し、上向きで焼成を実施している。底部付近に「X」のヘラ記号が認められた。

この出土須恵器から、SD 04の時期は大谷編年出雲5期を前後する時期と考えられるが、この遺構の具体的な性格については不明である。

遺構に伴わない遺物 (第4 4図)

1はSD 02付近で出土した須恵器壺で底径7.7cmを測る。底部に糸切痕が認められる。2は劍畠1号墳とSD 02の間の丘陵尾根北側で出土した須恵器壺で底径8.9cmを測る。3はSD 02付近で出土した高台が付く須恵器壺で、高台径8.8cmを測る。4は完形の須恵器で、器高12.0cm・口径9.2cmを測る。外面底部付近は回転ヘラケズリを施し、頸部内面にしづりの痕跡が認められる。5は1号墳の表土から出土した須恵器壺口縁部で、口径13.2cmを測る。6も1号墳表土中から出土した底部に高台が付く須恵器壺もしくは壺の底部である。外面底部付近は回転ヘラケズリが施されている。

註

- (1) 安来市教育委員会『長曾土壤墓群』1981
- (2) 鹿島町教育委員会『南譲武田遺跡』譲武地区県営農場整備事業発掘調査報告書5 1992
- (3) 島根県教育委員会『高広道路発掘調査報告書』和田团地造成工事に伴う発掘調査 1984
- (4) 大谷晃二『出雲地域の須恵器の編年と地域色』『島根考古学会誌』第11集 1994

第4章 まとめ

第1節 長曾土壙墓群

長曾土壙墓群では前回の1981年の調査⁽¹⁾された遺構も合わせると、土壙墓・木棺墓68基、溝状遺構2条検出した。埋葬された時期はその出土した土器から弥生時代後期後葉から末葉にかけてと推定され、黒井田地区の同時代の様相を知る上で貴重な資料を提供したと言えよう。以下、今回の調査の整理する過程で筆者の気づいた点を整理し、それについて若干の考察を行いたい。

1) 墓群構成について

今回の調査で土壙墓・木棺墓群は明瞭な区画を持つものが2基と、他に明確な区画は認められないが、墳墓の墓壙底レベルや墳墓の立地や地形などから勘案してA~Iの9の支群に分けることができる（第45図）。以下、それぞれの区画墓・群の概略を説明する。

区画墓1は、1981年の調査報告書の中で中央土壙墓群とされていたもので、SK19・20・21・22・23・27の6基の埋葬施設から構成される。尾根筋に直交する明確な区画溝（SD01）を持っている。埋葬施設の主軸方位は、規模などから中心的な埋葬施設と考えられる大形の整った断面2段掘のSK19とそれに次ぐ規模のSK23と小型の埋葬施設であるSK21は尾根筋に直交し、その他の埋葬施設は尾根筋に平行する。墓壙底の長さが1.7m以上の成人を埋葬したと考えられるものが2基（SK19・23）、1.2~1.7mの小児・青年を埋葬したと考えられるものが1基（SK27）、1.2m以下の乳幼児を埋葬したと考えられるものが3基（SK20・21・22）ある。⁽²⁾出土遺物は、群中最も大型の埋葬施設であるSK19から壺・鼓形器台2・標石が出土しており、その所属時期は草出5期である。SK23の墓壙底から朱が検出されている。また区画溝であるSD01からは鼓形器台・低脚壺が出土している。

区画墓2は、丘陵頂部の先端に位置し、主軸方位が尾根筋に直交するSK67の1基で構成される單数埋葬である。墓壙底の長さが1.7m以上で、成人を埋葬したものと考えられる。遺物が検出されなかつたことから、所属時期については不明である。

A群はSK29・30の2基から構成され、主軸方位はいずれも尾根の走向に対して平行する。墓壙底の長さはいずれも1.2m以下で、乳幼児を埋葬したものと推定される。遺物が検出されなかつたことから、所属時期については不明である。

B群は1981年の調査報告書の中で西側上壙墓群とされていたもので、SK24・25・26の3基から構成される。A群と分けた理由は、墓壙底レベルがA群が標高1.8mの後半でまとまっているのに対しB群が標高1.8m前後でまとまっていることと、若干であるが両群の立地が離れていることからである。墓壙底の長さがいずれも1.7m以上で、成人を埋葬したものと考えられる。出土遺物は、群中最も整った断面2段掘を呈するSK24から吉備系壺などが出土している。

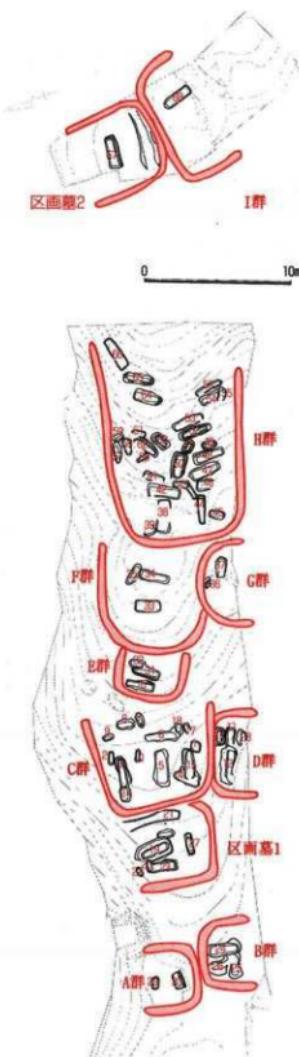
C群は1981年の調査報告書の中で東側上壙墓群とされていたもので、SK1~10・14・15・17・18の14基から構成される。前回の調査の遺構配置図（第7図）を見ると、埋葬地は不整形ながら台形状に整えられているようにも観察され、前回の調査では北側斜面には貼石が認められたが、今回の調査では検出できなかった。丘陵基軸側で区画溝は認められない。遺構の配置状況は、墓壙の

長さが2mを越す大型のSK03・05・15が主軸方位が尾根筋に平行して3基並列し、その中央に位置するSK05の東側に主軸方位が尾根筋に直交する墓壙長が2mを越すSK06が位置する。墓壙長が約1.7mのSK04がSK15と接して位置し、その他の小型の埋葬施設は大型の埋葬施設周辺に配置されている。墓壙底の長さが1.7m以上の成人を埋葬したと考えられるものが5基(SK3・4・5・6・15)、1.2m以下の乳幼児を埋葬したと考えられるものが9基(SK1・2・7~10・14・17・18)ある。出土遺物は、SK05から鼓形器台、SK06から注口土器・鼓形器台・標石が出土している。出土遺物から所属時期は、草田3期(SK05)~4期(SK06)と考えられる。

D群はC群の南に隣接し、尾根筋より若干下がった場所に位置する。群構成はSK11~13・28の4基からなり、主軸方位はいずれも等高線に対して平行である。墓壙底が1.7m以上の成人を埋葬したと考えられるものが1基(SK12)、1.2m以下の乳幼児を埋葬したと考えられるものが3基(SK11・13・28)ある。遺物が検出されなかったことから所属時期については不明であるが、C群とD群との位置関係からC群→D群の順で構築されたものと推定される。

E群はSK16・31・32の3基から構成され、主軸方位はいずれも等高線に対して平行である。墓壙底の長さが1.7m以上の成人を埋葬したと考えられるものが2基(SK16・31)、1.2m以下の乳幼児を埋葬したと考えられるものが1基(SK32)ある。遺物が検出されなかったことから、所属時期については不明である。出土遺物は、SK31から標石を2個検出しているのみで、所属時期については不明である。

F群はSK33~35の3基から構成され、主軸方位は等高線に平行するもの(SK33・34)と直交するもの(SK35)がある。墓壙底の長さが1.7m以上の成人を埋葬したと考えられる



第45図 長曾土壤墓群グループ分け図
(区画図1・2、A~I群)

ものが2基（SK33・34）、1.2～1.7mの小児・青年を埋葬したと考えられるものが1基（SK35）ある。このG群は尾根筋を「コ」の字状に整形しているように観察された。このことと併せて、G群の尾根基軸側が奈良時代の溝状遺構SD02が掘られていることから、調査前に地形からこのG群を「劍畠2号墳」と認識することになった。このG群の丘陵基軸側は前述のようにSD02によって削平されているが、その溝状遺構の底部からSK38・39が検出されていることから、削平された場所に区画溝があったとは考えにくい。出土遺物は、この「コ」の字状に整形された平坦面から吉備系の壺もしくは器台と在土地器が数点、SK34から標石が1点検出された。

所属時期は、出土した土器から草田4期と考えられる。

G群はF群の南側に隣接し、丘陵尾根のやや下がった場所に位置する。調査前に一部削平を受けており正確な数は不明であるが、現状ではSK36・37の2基から構成され、いずれも一部もしくは大部分を削平を受けており正確な規模は不明である。主軸方位は等高線に対して平行している。遺物が検出されなかったことから所属時期については不明であるが、F群とG群との位置関係からF群→G群の順で構築されたものと推定される。

H群は丘陵尾根の傾斜が若干強くなる場所に形成され、SK38～66の28基から構成される。他の群と比較して数多く、しかも密に築かれている。当群を詳細に検討すると、さらに細かく分けることができるかも知れない。墓壙底の長さが1.7m以上の成人を埋葬したと考えられるものが10基（SK38・40・47・48・52・53・56・62・64・66）、1.7～1.2mの小児・青年を埋葬したと考えられるもの4基（41・43・50・65）、1.2m以下の乳幼児を埋葬したと考えられるものが11基（42・45・49・51・55・57～61・63）ある。出土遺物はすべて原位置を保っておらず個々の埋葬施設の時期は不明であるが、周辺で出土した遺物は草田3～5期である。

I群は区画墓2の南側に位置し、SK68の1基のみ確認されている。尾根筋に平行し、墓壙底の長さから成人が埋葬されているものと推定される。遺物が検出されなかったことから、その所属時期については不明である。

なお、劍畠1号墳が築かれた当遺跡の西側の丘陵先端部は土壙が築かれていないが、当遺跡がその他の尾根上すべてにまんべんなく築かれていることから、当場所にも埋葬施設が築かれていたと考えるのが自然である。これは劍畠1号墳を築造する際に、比較的大規模に地山の整形を行ったからかも知れない。これも推測の域を出ないことから、ここではその可能性があることを指摘するだけにとどめておきたい。

2) 木棺の構造について

上塙はいずれも壠方が長方形で、裏込め土の遺存によって木棺と確認できる土壙が14基所在するが、土壙の形態からその他の土壙も埋葬主体が木棺であるものが多いと推測される。その大部分が小口穴のない底面がフラットな土壙で福永伸哉氏の分類によるII型木棺墓と推定されるが、なかには同型式以外の木棺と考えられるものも少数存在する。SK07・27・58は墓壙底両端に小口溝が掘られ福永伸哉氏の分類によるI型木棺墓と考えられるが、SK31のように墓壙底の片側のみ小口溝が掘られている土壙も存在する。また、墓壙底の周囲を浅い溝が巡る上塙（SK12・38・40・51）も所在し、上記と異なる木棺の型式である可能性がある。

3) 出土遺物について

出土遺物については、若干の墓壙で埋葬ごとに供獻されていることが確認されるものがあるが、その大半のものは原位置を保っておらず、個々の埋葬主体の所属時期を決定することは難しい。

の中でも、注目されるのは吉備系土器の出土である。B群SK24とF群の平坦面から出土している。器形は長頸壺もしくは器台で、およそその時期は草田3~4期併行期であると考えられる。⁽¹⁾市内吉備系遺物が出土した遺跡は、臼コクリ遺跡⁽²⁾・鍵尾遺跡⁽³⁾・石田遺跡⁽⁴⁾・宇山遺跡⁽⁵⁾などが挙げられ、その時期は後期前葉から後葉にかけてである。

標石の出土は、SK06・19・31・34の4基で確認された。そのほとんどがなんらかの使用痕を持つ石器である。いずれも、出土した埋葬施設はそれぞれの区画墓・支群の中でも大型のもので、いずれも主軸方位が丘陵尾根筋に直交している。出土した標石のなかでもSK31の墓壙上から出土した2つの石器が、擦石と台石のセットとなる可能性があり注目される。⁽⁶⁾

なお、渡辺貞幸氏らがいうように今回の報告で「標石」とした主体部上方の墳丘面に置かれた礫が単なる埋葬施設の「墓標」などではなく、本来何らかの用途に使用された石器が埋葬後の一連の祭儀の結果、主体部の上方に置かれた可能性が高いということは筆者も認識している。しかし、今回の報告ではその主体部上方に置かれた礫に対して適切な単語が見つからず、暫定的に「標石」という言葉を使用した。

4) まとめ

出土遺物については、その大半のものは原位置を保っておらず、個々の埋葬主体の所属時期を決定することは難しいことを承知の上、当遺跡のおおよそ変遷について示したい。まず、出土遺物から、まず貼石を持つC群が最初に構築されたものと推定される。時期は草田3期で、群中最も大型のSK05が築かれ、その東側には主軸方位が異なるSK06が草田4期に築かれている。II群でも草田3期の土器が出土しており、C群と同様な時期に埋葬を始めた可能性がある。草田3期もしくは若干後出する時期で、C群を挟んでその前後に吉備系土器が副葬されたB群・F群が構築されたものと推定される。その後、B・C・F群の間や周りを埋めるように土壙墓・木棺墓群が構築されたものと推定される。周辺の出土土器からこの当遺跡の埋葬は、草田5期には終了していたものと考えられる。

当墳墓の性格を考える上で墓壙底の長さを見てみると、1.7m以上の成人を埋葬したと考えられるものが25基、1.2m~1.7mの小児・青年を埋葬したと考えられるものが7基、1.2m以下の乳幼児を埋葬したと考えられるものが29基所在した。このことから当墳墓は家族墓的な性格が強いものと考えることができる。

当墳墓が築かれた時期は、南側の山塊を一つ隔てた臼コクリ遺跡では吉備の特殊器台が、また平野南側の鍵尾遺跡では貼石を持ち吉備系土器が入っている。また安来平野西側では大型の四隅突出型弥生墳丘墓が連続して築かれている。その他にも安来平野では当該期の弥生墳墓が数多く築かれており、これらの墳墓のあり方が、これら墳墓の被葬者間の関係や広域的な対外交渉を示しているのかを明らかにすることが今後の重い課題である。

第2節 剃畠1号墳

1) 墳丘について

当古墳は径約12mの円墳で、標高約19.5mの丘陵先端の尾根上に位置し、北側と西側の小規模な平野や遠方には中海を望むことができる。墳丘の構築は、地山を整形した後に盛土を行っている。明確な旧表土が検出されなかったことから、地山整形はある程度規模の大きな造作であったと推測される。このことは、その盛土下部から長曾土壤墓群を構成する埋葬施設が検出されなかったことからも傍証できよう。盛土は大きく2つの工程に分けられる。まず約40cm程盛土を施した後に、断面が2段の墓壙を掘削し、その一部は地山まで到達している。墓壙に木棺を安置した後、その上に約20cm程盛土を施す。主体部はほぼ中央に1基検出したのみで、その他の埋葬施設は検出していない。墓壙内埋土の状況から、主体部は木棺であったと推測される。

2) 円筒埴輪について

円筒埴輪は墳頂部から墳裾にかけて、墳頂部から転落したと考えられる状況で出土した。当古墳から出土した埴輪の大半は細片化しており、全体の形態については不明である。その特徴については本文にもふれたが改めて整理すると

- ①全体像は、タガ付近で径約16cmと比較的小型のものと推定される。
- ②胴部もしくは口縁部に2次調整が認められる個体もある。
- ③底部調整は施されていない。しかし、底端部内面の埴輪自体の重みで広がった粘土を、横方向にケズリ落としている。
- ④タガを付設する前に、工具で浅い沈線を横方向に引いている。
- ⑤黒班が確認される個体がある。

このうち③と同様な調整は、底部調整が導入される直前の時期に見られるという。現在、出雲地方で底部調整の導入は、陶邑編年⁽¹⁾TK23併行期もしくはそれを若干遅る可能性が考えられる。同様な調整を円筒埴輪底部に施したもののが確認される古墳として、5世紀後半に築造された松江市石屋古墳が挙げられる。⁽²⁾

④と同様な調整を施す古墳として、当古墳から南東約3kmに所在する径25mの円墳である五反田1号墳が挙げられる。⁽³⁾ 同古墳出土の埴輪は、タガ付設前にヘラ状工具により比較的短い短線を横方向に引き、その短線の長さは2~3cmと比較的短いものが多いといいう。⁽⁴⁾ 確認できる破片数は少ないながらも、すべての個体で沈線が破片にめいいっぱい引いていることから全周沈線を引いている可能性も考えられる。⁽⁵⁾

⑤の黒班は2個体確認されている。出雲地方で黒班のある埴輪が確認される古墳として、安来市向山遺跡・五反田1号墳・松江市井ノ奥1号墳・荒神畠古墳・大垣大塚古墳・八雲村増福寺3号墳・宍道町上野1号墳が挙げられ、時期幅は4世紀代から初期須恵器併行期まで認められる。

以上のような特徴から当古墳出土の埴輪の時期は、③の調整を重視すれば藤永照隆氏の埴輪編年の3期古相、⑤の黒班を重視すれば2期に相当する。出雲地域の当該期の円筒埴輪の様相は判然としないことから、現状では剃畠1号墳の築造時期は5世紀中葉から後葉と考えたい。

註

- (1) 安来市教育委員会「長曾土壙墓群」1981
- (2) 便宜的に、墓壙底の長さが1.7m以上のものを成人、1.2m~1.7mのものを小児・青年、1.2m以下のものを乳幼児が埋葬されたものと推定した。
- (3) 福永伸哉「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻第1号 考古学研究会 1985
- (4) 島根県教育庁文化財課椿真治氏、教示。
- (5) 島根県教育委員会「白コクリ遺跡・大原遺跡」一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V- 1994
- (6) 藤瀬利栄「付章 島根県越尾遺跡出土の土器について」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室 1992
- (7) 島根県教育委員会「石田遺跡」一般県道米子伯太線道路改良工事に伴う埋葬文化財発掘調査報告書 1994
- (8) 安来市教育委員会「宇山遺跡」植田地区急傾斜崩壊対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2000
- (9) 島根県教育庁文化財課足立克己氏、教示。
- (10) 渡辺貞寺「西谷墳墓群の調査(I)」「山陰地方における弥生墳丘墓の研究」島根大学法文学部考古学研究室 1988
- (11) 田辺昭三「須恵器大成」1981年
- (12) 松江市教育委員会「史跡石畳古墳」1985年
出雲市教育委員会藤永照隆氏、教示。
- (13) 池洞俊一「門生黒谷Ⅰ遺跡の調査」「門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡(門生山根1号塚・門生黒谷1号塚・五反田古墳群)」一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14- 島根県教育委員会 1998
- (14) 当古墳出土の埴輪のタガ付設前の調整は、五反田1号墳出土のものとは大きく異なるという。島根県教育庁池洞俊一氏、教示。
- (15) 藤永照隆「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌』第14集 1997

図 版



調査前遠景（西から）



調査前近景（東から）



長曾土壤墓群調査後近景
(東から)

図版2



長曾土壤墓群SK03・14



長曾土壤墓群SK40・41・42・43



長曾土壤墓群SK50・51



長曾土壤墓群SK66



長曾土壤墓群
SK19・20・21・23



長曾土壤墓群SK40～60



長曾土壤墓群
SK40～54、57～61

図版4

長曾土壤墓群
SK16・31・32

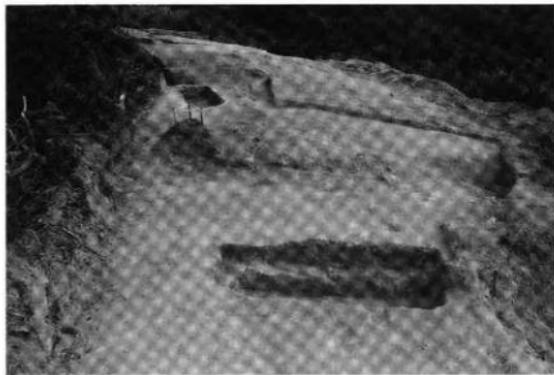


長曾土壤墓群
SK31標石検出状況



長曾土壤墓群
SK34標石検出状況





長曾土壤墓群
SK67、SD03（区画墓2）



SD02土層堆積状況



刎畠1号墳
調査後遠景（東から）

図版6

刎畠1号墳
墳丘盛土除去後（東から）



刎畠1号墳
主体部（西から）

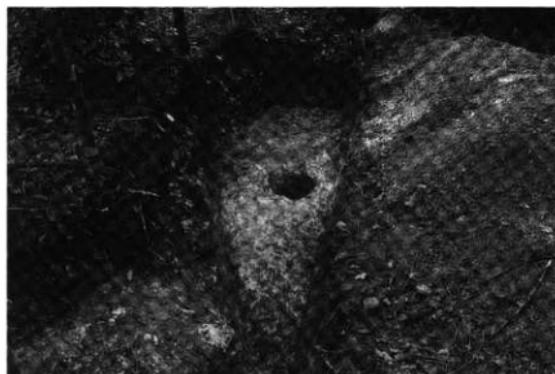


刎畠1号墳
主体部完掘状況（東から）





米垣遺跡遠景

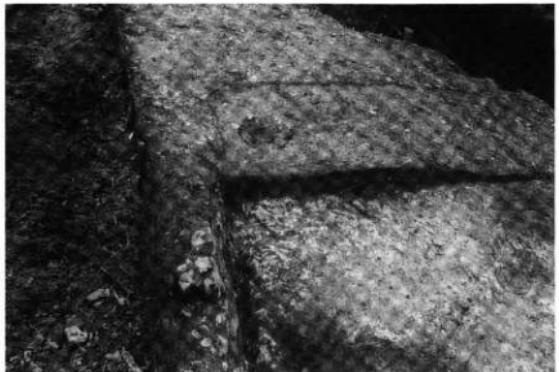


米垣遺跡 S B01S 完掘状況

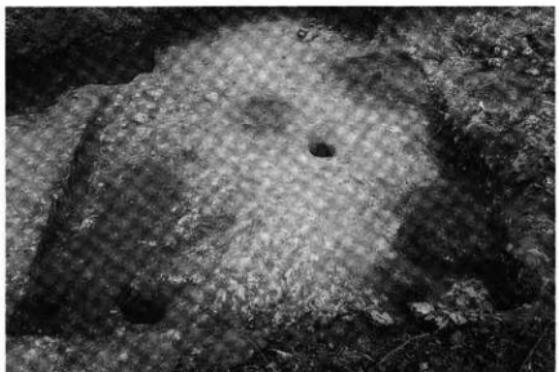


米垣遺跡 S B02 完掘状況

図版8



米垣遺跡SB03内
埋土堆積状況



米垣遺跡SB03内
焼土分布状況



米垣遺跡SB03完掘状況

報告書抄録

ふりがな	ちょうそどころばぐん・はねはたいちごうふん				
書名	長曾上墳墓群・刎畠1号墳				
副書名					
巻次					
シリーズ名	安来市埋蔵文化財調査報告				
シリーズ番号	第33集				
編集者名	水口晶郎				
編集機関	安来市教育委員会				
所在地	〒692-0011 島根県安来市安来町874-20 ☎ 0854-22-2149				
発行年月日	西暦2000年3月31日				
ふりなが 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東經	調査期間
長曾上墳墓群 刎畠1号墳	島根県安来市 黒井田町字 刎畠	32206	397 280	35° 25' 25"	133° 16' 15" 19990427 ~19990720
調査面積	1,000 m ²		調査原因	工場用地造成事業に伴う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長曾上墳墓群	墳墓	弥生時代	区画墓・土壤 墓・木棺墓群	弥生土器、標石	上墳墓・木棺墓を68基検出した。
刎畠1号墳	古墳	古墳時代	円墳	鉄製大刀・刀子・ 円筒埴輪	主体部から鉄製刀が出土した。

安来市埋蔵文化財調査報告第33集

長曾上墳墓群・刎畠1号墳

2000年3月発行

発行 安来市教育委員会
印刷 有限会社 宇山印刷所